

史跡 高天神城跡

— 二の丸ゾーン発掘調査報告書 —

2004

静岡県小笠郡大東町教育委員会

し せき たか てん じん じょう せき
史跡 高天神城跡

— 二の丸ゾーン発掘調査報告書 —

2004

静岡県小笠郡大東町教育委員会

序

史跡高天神城跡は大東町が誇る貴重な文化遺産です。戦国時代において徳川氏と武田氏との激しい戦いが繰り広げられた舞台となりました。最後に徳川氏が高天神城を取り返した後は、城として使われることはありませんでした。

その後、高天神城の大部分がお宮の杜として、後世の開発を受けることなく地域の皆様により、大切に守られ続けたため、現在でも当時とほとんど変わらぬ山城の姿を見ることができず。

町でも平成7年度に保存管理計画を、平成10年度には基本整備計画をそれぞれ策定し、保存整備を進めてまいりました。また平成10年度からは、整備事業の一環として二の丸ゾーンの発掘調査を実施しております。

その発掘調査から、今まではっきりしていなかった高天神城の姿が徐々に明らかになってきています。

例えば、堀は現在の状態よりもさらに深く、土塁は一層高く、袖曲輪には門が、その北の堀切には木橋がかけられていたことがわかりました。また、遺物では鉄砲玉や、完全な形の天目茶碗、中国から輸入された陶磁器の破片などが数多く見つかっています。

しかし、調査を実施したのは、広大な高天神城の一部だけであり、全ての調査が終了するのはまだ、10年以上は先のこととなるでしょう。この度、二の丸ゾーン発掘調査が終了し、調査報告書を作成いたしました。今後はこの調査成果を基に保存整備を進めて参ります。保存整備された史跡高天神城跡が憩いの場や、歴史学習の場として十分に活用されていくことを願っております。

最後になりましたが、高天神社の氏子をはじめとする地域の皆様のご理解、ご協力と、整備委員会委員の皆様および、ご指導を賜りました皆様にお礼申し上げますとともに、今後とも、変わらぬご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

平成16年3月

大東町教育委員会 教育長 中谷 孝彦

例 言

- ・本書は大東町上土方嶺向字鶴翁山3138-2に所在する、史跡高天神城跡二の丸ゾーンの発掘調査報告書である。
- ・史跡整備に伴う発掘調査で、国および県の補助を得て実施した。
- ・発掘調査は史跡高天神城跡整備委員会の指導のもと大東町教育委員会が主体となり実施した。
- ・発掘調査および出土品の整理、本書の作成は大東町教育委員会社会教育課 鬼澤勝人、夏目不比等が中心に行った。
- ・平成10、13、14年度に調査を実施し、平成15年度は整理事業と追加調査を実施した。
- ・平成15年度整備委員会
専門委員 服部英雄 (九州大学大学院・歴史学)…委員長
山下 晃 (考古学)…副委員長
後藤元一 (札幌市立高等専門学校・整備)
建部恭宣 (日本建築専門学校・建築学)
千田嘉博 (国立歴史民俗博物館・城郭史)
- 町内委員 大倉重信 (大東町長)…副委員長
川口 功 (大東町助役) 中谷孝彦 (大東町教育委員会教育長)
鳥井昌彦 (大東町議会議長) 雑賀祥宣 (第1常任委員会委員長)
高塚昌彦 (町議会議員・上土方区) 鷺山哲朗 (町議会議員・土方区)
赤堀 茂 (町議会議員・下土方区)
鈴木定夫 (下土方区長) 大石 徹 (土方区長) 水島芳雄 (上土方落合区長)
柴田大司 (高天神社 宮司) 鷺山 範 (高天神社 氏子総代会会長)
戸塚 秀 (町文化財保護審議会会長)
青野 茂 (高天神戦国ロマンの里を育てる会会長)
- 事務局指導 文化庁記念物課 静岡県教育委員会文化課
- 事務局 大東町教育委員会 社会教育課 社会教育係
- ・調査の開始より、報告書の作成に至るまで、下記の方々にご指導をいただいた。(敬称略)
足立順司 安藤孝一 池谷初恵 伊藤正彦 小野正敏 加藤理文 河合 修 木戸雅寿
斎藤慎一 澁谷昌彦 関口宏行 塚本和弘 中井 均 乗岡 実 原 廣志 藤沢良祐
松井一明 三浦正幸 溝口彰啓 森 宏之

・発掘作業員

相澤猪一郎 赤堀慎 石川とみ 伊藤静江 伊藤晴夫 稲垣佳正 岩倉好枝 大塚幸彦
大橋久枝 大橋年子 岡田かね子 鎌田雅子 鎌田洋輔 鎌田真貴 川口由郎 川島一一
北村俊信 熊切敏明 倉野邦夫 倉野浩美 栗田久治 近藤広充 坂部須美子 坂部マサエ
鈴木和子 鈴木実 高塚千代子 高塚敏郎 田端謹吾 富田利雄 永田孝 中谷栄一 萩原とめ
平野博司 藤田実 藤田とし子 藤田房幸 藤田理恵 二俣順哉 増田昇 松下勝利 松下光江
水野陽介 溝口錠一 森下昭 森下磨瑛之 八木敏明 山崎ふさ 山下道雄
大正大学学生
稲垣真理子 猪瀬可奈子 宇賀神弘 川島裕毅 四家敬士 鈴木知恵 高橋知子
高山太助 豊田拓哉 中村未知 福井茂 松野友美 宮本久子 吉田智哉

・整理作業員

藤田房幸 藤田理恵

- ・平成10年度の空中写真撮影は国際航業株式会社に委託した。
- ・平成13、14年度グリッド杭の設置および空中写真撮影等は、株式会社フジヤマに委託した。
- ・平成14年度発掘調査において出土した漆膜の保存処理は株式会社吉田生物研究所に委託した。
- ・発掘調査において出土した遺物、調査記録等は、全て大東町教育委員会にて保管している。

凡 例

- ・本発掘調査における基準点、グリッド杭等の測量には、日本測地系を使用した。
- ・グリッドは真北にあわせ、5m間隔で設定した。
- ・出土遺物の実測図は基本的に土器、石製品は1/3、金属製品は1/2縮尺で掲載した。
一部、実寸大で掲載した遺物もあり、縮尺の違いごとにスケールを付けた。
- ・図中の数字は海拔を示している。
- ・図中のは地山を示している。
- ・写真図版内のNo.○-□は、○は図版No.を、□は図版内No.を示す。
- ・史跡高天神城跡には曲輪に本丸、二の丸、西の丸といった名称がついている。本来、「～丸」という名称は主に近世の城郭に伴うものであるが、天正9年の近江地方においてすでに本丸、二の丸という名称が使用されている記録もあり、あながち間違いではないと思われる。本書ではその他の名称不明の曲輪についても便宜的に「史跡高天神城跡保存管理計画」で使用されている名称を用いるが、その名称は確定ではない。

目次

序

例言

凡例

はじめに	1
高天神城跡の位置	2
史跡高天神城跡を取り巻く環境	4
地理的環境	4
歴史的環境	4
平成10年度調査	9
調査に至る経緯	9
調査方法	9
調査経過	10
平成13年度調査	12
調査に至る経緯	12
調査方法	12
調査経過	12
平成14年度調査	14
調査に至る経緯	14
調査方法	14
調査経過	14
遺構について	17
堂の尾曲輪について	17
井楼曲輪について	20
腰曲輪について	23

二の丸について	24
袖曲輪について	26
馬出し曲輪について	28
尾曲輪について	29
横堀について	30
畝堀について	35
堀切について	36
土橋について	37
堅掘について	38
その他の遺構について	39
遺物について	40
堂の尾曲輪出土遺物	40
井椽曲輪出土遺物	43
二の丸出土遺物	45
土橋出土遺物	51
袖曲輪出土遺物	51
馬出し曲輪出土遺物	51
横堀出土遺物	52
尾曲輪出土遺物	52
まとめ	55
おわりに	57

図 版 目 次

第 1 図	史跡高天神城跡位置図	3
第 2 図	史跡高天神城跡周辺図	5
第 3 図	二の丸ゾーン発掘調査位置図	7
第 4 図	平成10年度調査トレンチ、グリッド設定図	11
第 5 図	平成13年度調査トレンチ、グリッド設定図	13
第 6 図	平成14年度調査トレンチ、グリッド設定図	15
第 7 図	堂の尾曲輪土塁断面図	17
第 8 図	堂の尾曲輪完掘図	18
第 9 図	堂の尾曲輪小屋掛け遺構実測図	19
第10図	井楼曲輪完掘図	21
第11図	井楼曲輪設定トレンチ実測図	22
第12図	井楼曲輪腰曲輪完掘図	23
第13図	二の丸完掘図	25
第14図	袖曲輪完掘図	27
第15図	馬出し曲輪実測図	28
第16図	尾曲輪実測図	29
第17図	堂の尾曲輪No.2トレンチ実測図	31
第18図	横堀設定トレンチ実測図 ①	32
第19図	横堀設定トレンチ実測図 ②	33
第20図	横堀西側土塁実測図	34
第21図	畝堀実測図	35
第22図	堀切実測図	36
第23図	土橋周辺実測図	37
第24図	縦堀設定トレンチ実測図	38
第25図	堂の尾曲輪検出遺構実測図	39
第26図	堂の尾曲輪出土遺物実測図 ①	41
第27図	堂の尾曲輪出土遺物実測図 ②	42
第28図	堂の尾曲輪出土遺物実測図 ③	43
第29図	井楼曲輪出土遺物実測図	44
第30図	二の丸出土遺物実測図 ①	46
第31図	二の丸出土遺物実測図 ②	47
第32図	二の丸出土遺物実測図 ③	48
第33図	二の丸出土遺物実測図 ④	49
第34図	二の丸出土遺物実測図 ⑤	50
第35図	土橋、袖曲輪、馬出し曲輪出土遺物実測図	51
第36図	横堀出土遺物実測図 ①	52
第37図	横堀出土遺物実測図 ②	53
第38図	尾曲輪出土遺物実測図	54

表 目 次

第1表	平成10年度調査出土遺物観察表	58
第2表	平成13年度調査出土遺物観察表	63
第3表	平成14年度調査出土遺物観察表	65
第4表	平成15年度調査出土遺物観察表	76

写 真 図 版 目 次

図版 1	史跡高天神城跡遠景	堂の尾曲輪作業風景
図版 2	堂の尾曲輪完掘状況	堂の尾曲輪検出小屋掛け遺構
図版 3	堂の尾曲輪西側横堀	井楼曲輪調査前(北端部)
図版 4	井楼曲輪調査前(南側)	井楼曲輪完掘状況
図版 5	井楼曲輪完掘状況(北端部)	井楼曲輪完掘状況(南側)
図版 6	井楼曲輪檜台下横堀	井楼曲輪西側横堀
図版 7	二の丸調査前	袖曲輪調査前
図版 8	二の丸完掘状況	袖曲輪完掘状況
図版 9	二の丸西側欽堀完掘状況	堀切南完掘状況
図版 10	井楼曲輪檜台下腰曲輪完掘状況	二の丸西側尾曲輪完掘状況
図版 11	堀切北完掘状況	横堀土塁完掘状況
図版 12	堂の尾曲輪出土遺物 ①	堂の尾曲輪出土遺物 ②
図版 13	堂の尾曲輪出土遺物 ③	堂の尾曲輪出土遺物 ④
図版 14	堂の尾曲輪出土遺物 ⑤	井楼曲輪出土遺物 ①
図版 15	井楼曲輪出土遺物 ②	二の丸出土遺物 ①
図版 16	二の丸出土遺物 ②	二の丸出土遺物 ③
図版 17	二の丸出土遺物 ④	二の丸出土遺物 ⑤
図版 18	二の丸出土遺物 ⑥	二の丸出土遺物 ⑦
図版 19	二の丸出土遺物 ⑧	土橋・袖曲輪・馬出し曲輪出土遺物
図版 20	横堀出土遺物 ①	横堀出土遺物 ②
図版 21	横堀出土遺物 ③	横堀出土遺物 ④
図版 22	尾曲輪出土遺物	

はじめに

史跡高天神城跡は、今川・徳川・武田の三氏が遠江の勢力拡大に必要とし、「遠江を制せんと欲すれば、まず高天神を制すべし。高天神を制せずして、遠江を制することあたわず。」とまで言われた中世の山城である。特に徳川氏、武田氏間の争奪戦は激しく、その舞台となった高天神城は貴重な城跡として、昭和50年には国の史跡として指定された。今は、当時の喧騒は想像できないほどひっそりと静まり、鳥の囀りのみが聞こえ、高天神社の鎮守の杜として地域の人々に大切に守られている。

近年の歴史ブームの中、テレビなどで取り上げられるたびに見学者がここを訪れる。そして、「荒城の月」の如く、多くの人々はその静けさの中、当時の攻防戦をはじめとする戦国ロマンに思いを馳せる。

しかし、訪れる見学者は口を揃えて「お城の様子が良く判らない」と言う。廃城からの約400年間に土塁はさらされ、堀は埋まってしまっているためである。

それでは当時の、戦国時代の高天神城は、一体どのような状況であったのであろうか？
静岡県小笠郡大東町に存する史跡高天神城跡は、今までに総合的な発掘調査は実施されておらず、史跡としての整備事業も未着手であった。

史跡の保護に重点をおくあまり、特に手を入れない状態であり、最小限必要な標柱や案内板の設置のみ行っていたため、一見しただけでは本来の遺構の様子が判り難い状況である。

これらに加え、長年の風雨による浸食の進行、台風などの大雨時には土砂崩落が発生するなど、史跡としての地形が消失する危惧が生じてきた。

そこで、平成7年度に「史跡高天神城跡保存管理計画」が、平成10年度には「史跡高天神城跡基本整備計画」が策定され、それぞれ策定報告書が刊行されている。

こうして、史跡の保存及び適正な管理を行なうとともに、遺構の保全と史跡の活用を図るため「史跡高天神城跡整備事業」に着手し、平成13年度に組織された、「史跡高天神城跡整備委員会」の指導のもと、史跡整備のための発掘調査を「史跡高天神城跡基本整備計画」の整備スケジュールに則って、順次実施していくこととなった。

本書は、史跡高天神城跡へ初めて考古学的なメスが入れられた、発掘調査の報告書である。

高天神城跡の位置

史跡高天神城跡の所在する大東町は、静岡県中西部に位置する小笠郡下に所在し、南北約11km、東西約5.5km、面積は約45km²で、人口22,000人を越える町である。北に掛川市、西に大須賀町、東に菊川町、小笠町、浜岡町の1市4町に接している。

また、町の北方には緑豊かな小笠山を抱え、南は広大な遠州灘に面しており、町内には、一級河川である菊川をはじめとする河川が流れており、豊富な自然にも囲まれている。

町の南側には国道150号線が、北は掛川市に国道1号線が走っており、どちらも町民にとって重要な交通手段である。また、東名高速道路掛川インターチェンジ、新幹線掛川駅の開設など、近隣に様々な交通手段が発達しており、生活はますます便利になってきている。

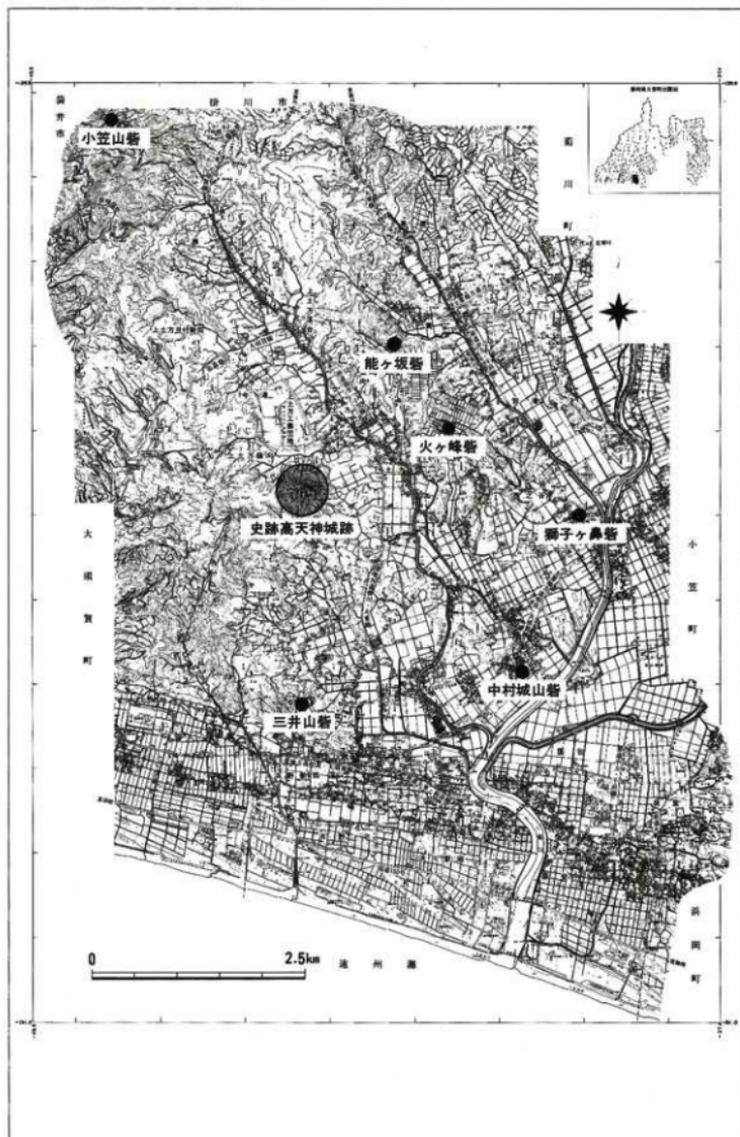
昔から農業が町の主な産業であり、米・茶をはじめとし、イチゴ・メロン・トマトなどが、主な農産物として出荷されている。近年では工業団地の整備が進み、企業の誘致も積極的に行ってきた結果、年々企業の数も増加しており、農業と工業がバランス良く発達している町である。

また、最近では、文化会館シオーネや大東温泉シートピアの建設、東京女子医科大学看護学部誘致なども行なわれ、文化、教育面においても、より充実してきている。今後、図書館資料館の建設も計画されており、これらの施設により町民の生活は一層豊かなものになっていくと思われる。

さらに当町からは、国学者で横須賀藩(現大須賀町)に仕えていた八木美穂、タンパク質・酵素の研究で世界的な權威となった赤堀四郎、教育者として日中友好の架け橋となった松本亀次郎、日本で22番目の女医となり東京女子医科大学を創設した吉岡弥生など優秀な人材を輩出している。それらの郷土の偉人は、町民の誇りとなっている。

今後、近隣市町との合併も予定されており、「大東町」の名前が消えることもあるかと思われるが、現町民の中に、「大東町」の名前、思い出は消えることなく残っていくであろう。

史跡高天神城跡はその大東町が見渡せる、町の中心よりやや西側にある丘陵上に位置している。



第1図 史跡高天神城跡位置図

史跡高天神城跡を取り巻く環境

地理的環境

高天神城跡周辺は、約100万年前に形成された小笠山礫層と、その下に形成されている掛川層群堀之内互層とが南西下がりとなるよう隆起しており、堀之内互層の柔らかい層が浸食され堅い層のみ残ったケスタ地形を呈している。さらに層の境から染み出す、雨水などを水源とする湧水からなる小河川の浸食を長年にわたり受けた結果、放射状の山塊が形成された。史跡高天神城跡が所在している大東町上土方嶺向字鶴翁山もその放射状の山塊の一つで、標高は132mになる。河川の浸食の結果、複雑に入り組み、切り立った崖に囲まれた地形は天然の要害といえる。

高天神城はその地形を利用して作られており、東西2つの峰に独立して存在する城が尾根で繋がっており、1つの城となっている、「一城別郭」式山城の典型例である。

城跡からは大東町内はもとより南は遠州灘、東は牧之原台地の端まで見渡すことが出来る。この眺望の良さも、この地に山城が築かれた理由であろう。

歴史的環境

大東町内には縄文時代、弥生時代の遺跡は少なく、古墳時代後期の横穴群および、中世の城館跡が多く分布している。中世の遺跡の多くは高天神城跡に関連する遺跡であり、周辺にも城攻めに使用された砦跡や、高天神城に関係のある武将の館跡などが多数所在している。いずれも本格的な調査は実施されていないため、詳細は明らかにはなっていない。

高天神城の築城時期は不明だが、少なくとも永正10(1513)年以前から今川氏の家臣である福島氏の城として使われていた事が判っている。その後桶狭間の戦い永禄3(1560)年における今川義元の死を機に、遠州地域における今川氏の勢力が衰退していくと、入替わるように徳川氏、武田氏の勢力が強くなっていった。情勢が変化していく中で、永禄11(1568)年高天神城は城主小笠原氏ともども徳川氏の配下となった。小笠原氏はその後の掛川城攻め、姉川の戦いにおいて活躍する。

元亀2(1571)年には、武田信玄が多数の兵を率いて高天神城を攻めたが、本格的な戦闘はなく、素通りしている。この出来事により信玄が攻めあぐねた難攻不落の城として高天神城が認識されるようになった。

天正2(1574)年5月、武田勝頼に攻め込まれると、高天神城は必死の抵抗を見せたが、長期の籠城により、兵も疲弊し、織田徳川の援軍の遅れたこととも重なり、ついに6月に落城、武田の支配する城となった。

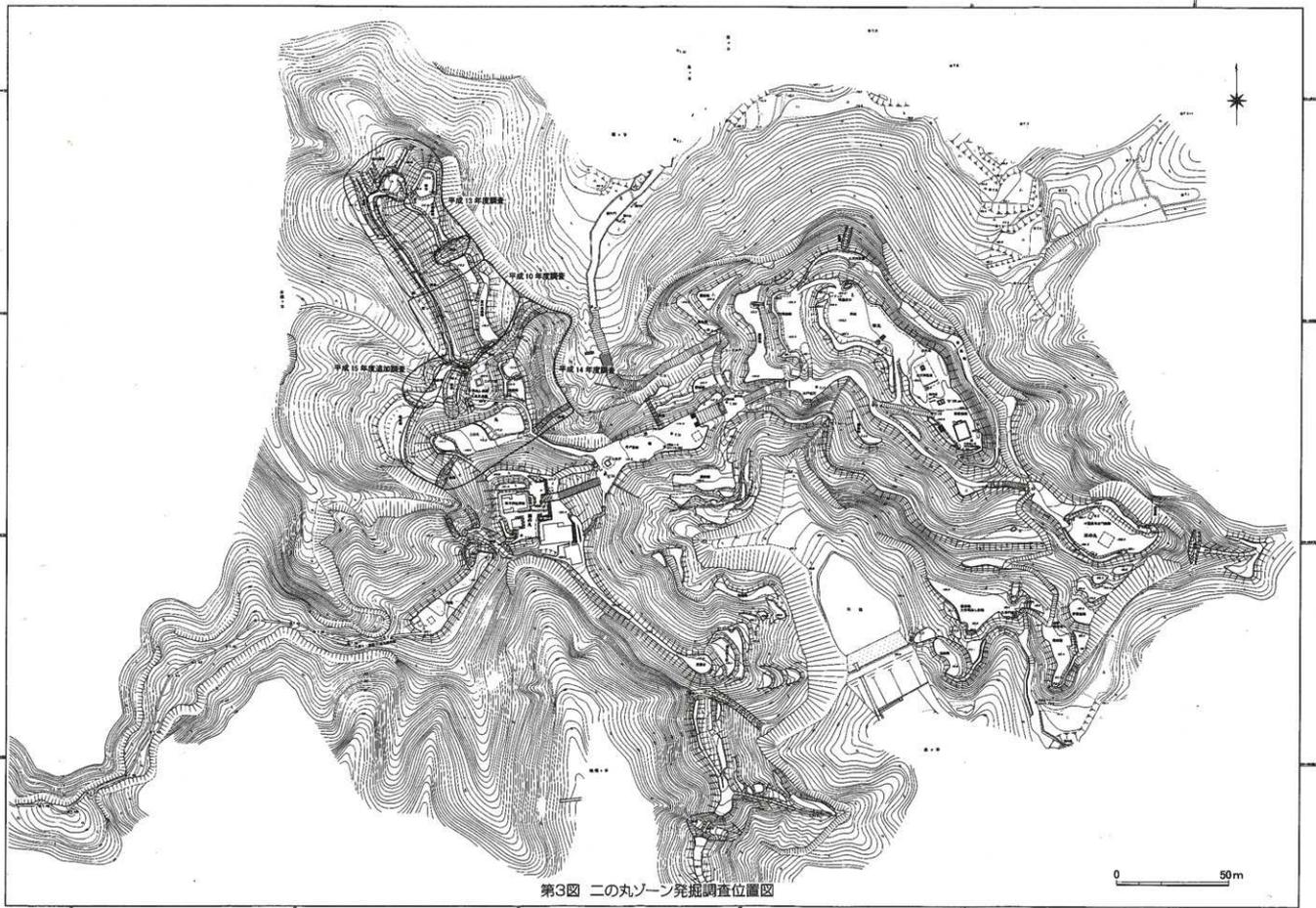
城を取られた形となった徳川氏は天正2年8月には馬伏塚城(現浅羽町)を、天正4(1576)年には横須賀城(現大須賀町)を、天正7(1579)年から8年にかけて高天神六砦を築き、高天神城への包囲網を完成させている。

その後徐々に包囲網を狭めつつ、高天神城への攻撃を続けた。天正9(1581)年3月に高天神城は落城し、徳川氏の手に戻るが、その後城として使用されことなく廃城となっている。



第2図 史跡高天神城跡周辺図

- 1.高天神城 2.宇神城 3.堀ヶ原砦 4.じょうげん1号墳 5.じょうげん2号墳 6.大谷田古墳 7.熊崎河内守館 8.取原口砦 9.矢本山砦 10.林ノ谷砦 11.粟美酒五郎屋敷
 12.土方氏館 13.堀ヶ谷横穴群 14.下土方青谷横穴群 15.渡辺金太夫屋敷 16.谷田古墳 17.堀ヶ谷古墳 18.小笠原石京屋敷 19.堀ヶ谷砦 20.黒川砦 21.黒川原
 22.黒田砦 23.番田古墳 24.周原内丸屋敷 25.芳神砦 26.七辻神社遺跡 27.栗の谷古墳 28.中川原砦 29.沖山号墳 30.山王遺跡 31.山王山古墳



第3図 二の丸ゾーン発掘調査位置図

平成10年度調査

調査に至る経緯

高天神城は、二度大きな戦いの結果、落城している。そのどちらも最初に堂の尾曲輪を落とされ、そこから二の丸、西の丸へと攻め込まれている。徳川氏と武田氏の激しい攻防が繰り返された場所であり、また、当該地点は神社の参道からも離れており、一般の人が足を踏み入れることも少なく、多量の遺構、遺物の検出が予想されていた。そのため、整備委員会において二の丸ゾーンより発掘調査を実施することに決定した。

更に二の丸ゾーンの中でも北に伸びる尾根の二の丸に近い方の堂の尾曲輪南半分及びその周辺にて調査を開始した。

平成10年度 史跡 高天神城跡基本整備計画策定委員会

専門委員 服部英雄(九州大学大学院・歴史学) 山下 晃(静岡県立浜名高等学校・考古学)
後藤元一(札幌市立高等専門学校・整備) 建部恭宣(日本建築専門学校・建築学)
千田嘉博(国立歴史民俗博物館・城郭史)

町内委員 杉浦徳雄(大東町長) 大倉重信(町助役) 三輪 隆(町教育委員会教育長)
福井豊高(町議会議長) 鈴木治弘(第1常任委員会委員長)
鷲山哲朗(町議会議員・土方区) 赤堀 茂(町議会議員・下土方区)
溝口 淳(下土方区長) 縣 一夫(土方区長)
内海訓雄(高天神社 氏子総代会会長) 大石信夫(町文化財保護審議会会長)
山崎久男(高天神戦国ロマンの里を育てるの会長)

事務局指導 本中 眞(文化庁記念物課)
鈴木利男(静岡県教育委員会文化課) 中鉢賢治(静岡県教育委員会文化課)

事務局体制 事務局長兼社会教育課長 赤堀 義雄 同 課長補佐兼文化係長 深川喜春
文化係主任 鬼澤 勝人 嘱託職員 夏目不比等

調査方法

調査はトレンチ法とグリッド法とを併用して行った。トレンチは全部でNo.1～7まで設定した。No.1、2、6トレンチは土塁と直交するように設定し、土塁の土層の観察を行った。そのうち、No.2トレンチは全体の地形の様相を把握するため、曲輪を横断し、横堀の外まで設定した。No.3、4、5トレンチは曲輪の範囲を明らかにするために、平坦部から崖にかけて設定した。No.7トレンチは曲輪東側北方の段差のある地点に設定した。それぞれ遺構面が確認されるまで掘り下げた。

グリッドは、No.2トレンチと直交するラインを主軸とし、それと直交するラインを、5m間隔で設定した。グリッドラインは30cm幅のベルトとして残した。主軸の東をA、西をB、南から1、2、3、…、7とし、それぞれの区画を、A-1区、A-2区、…、B-7区と呼称し、それぞれにおいて平面調査を行なった。

調査経過

9月25日から調査を開始し、下草刈りと樹木の伐採を行なった。

10月から11月の初旬まで、各トレンチの調査を実施した。

11月中旬からグリッド毎に平面調査を実施した。下旬よりベルトの実測を行なった。

12月初旬からベルトを除去し、平面清查を行ない、遺構、遺物の検出に努めた。中旬にNo.2トレンチの曲輪西斜面から横堀までの部分を掘り下げた。

1月初旬から、No.2トレンチの曲輪西側斜面から横堀部分の実測を行ない、2月初旬に空中写真撮影を実施した。

3月14日に現地見学会を開催し、その後埋め戻し作業を行なった後、3月19日に調査を終了した。



第4図 平成10年度調査トレンチ、グリッド設定図

平成13年度調査

調査に至る経緯

平成10年度調査は整備計画策定に先行して実施しており、引き続き平成11年度には整備計画に基づき二の丸ゾーンの発掘調査を行なう計画であった。しかし、地元との調整がつかなかったため、平成13年度になって「史跡高天神城跡整備委員会」を発足し、整備事業を開始し、その年度から本格的な発掘調査に着手した。

調査地点は平成10年度調査の続きである堂の尾曲輪の北半分と、堀切を挟み北側に位置する井楼曲輪及びその周辺にて発掘調査を実施した。

平成13年度 史跡 高天神城跡整備委員会

- 専門委員 平成10年度史跡高天神城跡基本整備計画策定委員会専門委員と同じ
所属変更 山下 晃(静岡県埋蔵文化財調査研究所・考古学)
- 町内委員 杉浦徳雄(大東町長) 大倉重信(町助役) 三輪 隆(町教育委員会教育長)
佐藤博俊(町議会議長) 岩倉龍雄(第1常任委員会委員長)
高塚昌彦(町議会議員・上土方区) 鷲山哲朗(町議会議員・土方区)
赤堀 茂(町議会議員・下土方区) 久保田勝太郎(下土方区長)
坪井孝一(土方区長) 青野 茂(上土方落合区長) 柴田大司(高天神社宮司)
鷲山謙一(高天神社氏子総代会会長) 戸塚 秀(町文化財保護審議会会長)
山崎久男(高天神戦国ロマンの里を育てる会会長)
- 事務局指導 本中 真(文化庁記念物課) 中鉢賢治(静岡県教育委員会文化課)
- 事務局体制 事務局長兼社会教育課長 大石碩也 同 課長補佐 藤田正行
社会教育係長 安藤 彰 同 主査 鬼澤勝人 同 主事 夏目不比等

調査方法

調査はトレンチ法とグリッド法とを併用して行った。トレンチはNo.1~12まで設定した。No.1~5トレンチは土塁と直交するように設定し、土層の観察を行った。No.6トレンチは堀切と直交させ、堀切の底を検出した。No.7~12トレンチは横堀の形状を明らかにするため、設定した。

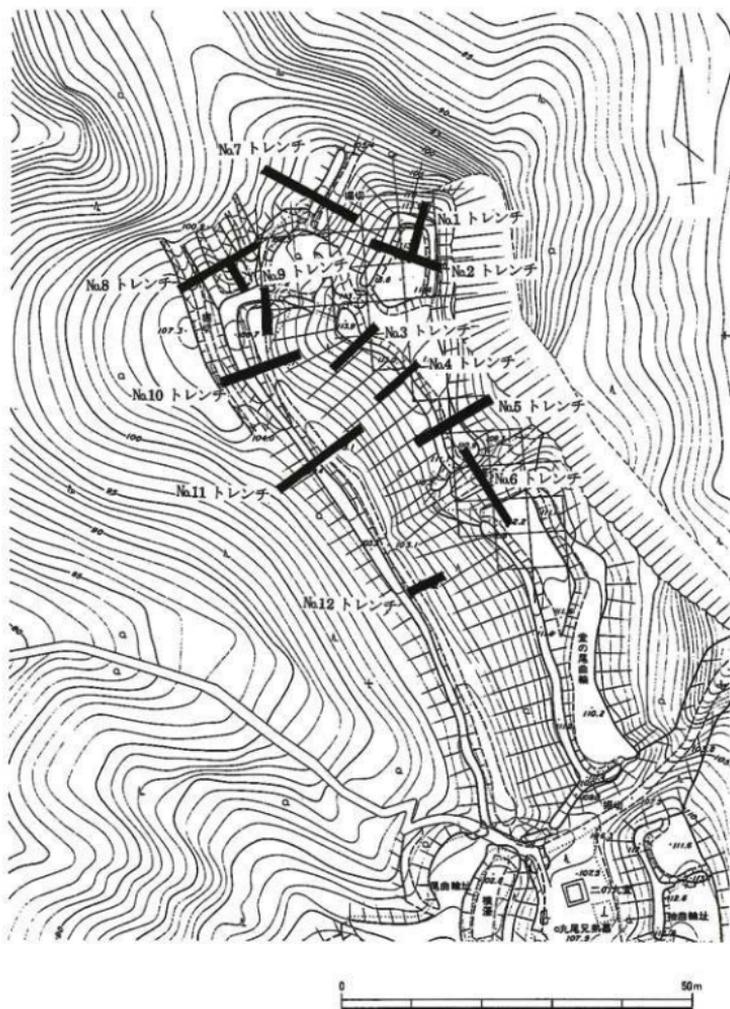
グリッドは真北にあわせ一辺5mで設定した。グリッドラインは30cm幅のベルトとして残し、平面調査を行なった。

調査経過

11月20日から調査を開始し、下草刈りおよび伐採の終了後12月下旬までトレンチ調査を実施した。

12月初旬から発掘の終了したトレンチより順次実測を行なった。

1月から3月中旬まで平面調査を実施し、遺構、遺物の検出に努めた。遺物を取り上げ、完掘し、全測図の実測を行ない、終了後空中写真撮影を実施した。3月20日に現地見学会を開催した後、埋め戻し作業を行ない、29日に調査を終了した。



第5図 平成13年度調査トレンチ、グリッド設定図

平成14年度調査

調査に至る経緯

平成14年度は二の丸ゾーンの最終年度にあたり、平成10、13年度調査に引き続き二の丸及びその周辺において発掘調査を実施した。

平成14年度 史跡 高天神城跡整備委員会

専門委員 平成13年度専門委員と同じ。

町内委員 大倉重信(大東町長) 川口 功(町助役) 中谷孝彦(町教育委員会教育長)
佐藤博俊(町議会議長) 岩倉龍雄(第1常任委員会委員長)
高塚昌彦(町議会議員・上土方区) 鷲山哲朗(町議会議員・土方区)
赤堀 茂(町議会議員・下土方区) 赤堀次次郎(下土方区長)
坂部 峻(土方区長) 溝口勝美(上土方落合区長) 柴田大司(高天神社宮司)
鷲山謙一(高天神社氏子総代会会長) 戸塚 秀(町文化財保護審議会会長)
山崎久男(高天神戦国ロマンの里を育てる会会長)

事務局指導 本中 眞(文化庁記念物課) 中鉢賢治(静岡県教育委員会文化課)

事務局体制 事務局長兼社会教育課長 澤柳良身 同 課長補佐 藤田正行
社会教育係主査 鬼澤勝人 同 主事 夏目不比等

調査方法

調査はトレンチ法とグリッド法とを併用して行った。トレンチはNo.1～6まで設定した。No.1トレンチは堅堀に、No.2～4トレンチは二の丸西側下の通路状部分と直交するように設定した。No.5トレンチは袖曲輪西側の横堀に設定した。No.6トレンチは当初堀切の底の形状を把握するために設定したが、橋脚跡の存在も考えられるとの指摘を受け、トレンチ方向を変更し、平面調査に切り換えた。

グリッドは真北に合わせ、一辺5mで設定した。ただし、ベルトは二の丸、袖曲輪等それぞれの曲輪の向きにあわせ設定し、平面精査を行なった。

調査経過

11月18日から調査を開始し、下草刈り、樹木の伐採を実施した。その後、No.1～4トレンチの調査を行なった。

12月初旬にNo.2トレンチ内で欽堀の一部が検出され、全体の様子を確認するため拡張した。それと並行して、二の丸の平面調査を実施した。

12月中旬には二の丸より出土した遺物を記録し、取り上げていった。同時に袖曲輪においても平面調査を開始し、遺物の出土とともにピットが確認された。

12月下旬にはNo.5、6トレンチを調査した。No.6トレンチでは西側に欽状の遺構が検出され、その周辺の様子を確認するため拡張した。

1月から2月にかけて二の丸、袖曲輪の精査および実測と並行して、馬出し曲輪、土橋周辺、尾曲輪において平面調査を実施した。

3月の初旬に空中写真撮影を行なった。現場見学会を3月16日に開催し、埋め戻し作業を行ない、28日に調査を終了した。

遺構について

堂の尾曲輪について

堂の尾曲輪の調査は平成10年度に南側、平成13年度に北側と2ヶ年に分けて実施した。

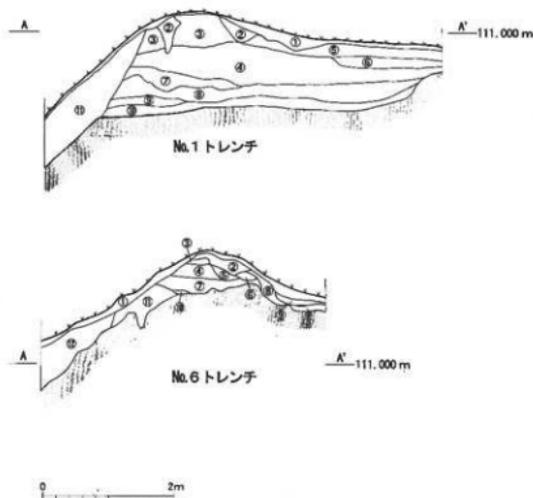
堂の尾曲輪の周辺に設定したトレンチ調査によると、曲輪の南方の東斜面は崩落している様子が確認でき、実際の曲輪は現状よりも広がったことが確認できた。このことにより堂の尾曲輪は自然の地形を生かし形成されていることが明らかになった。

堂の尾曲輪では建物が存在することを証明するピット等は検出されなかった。

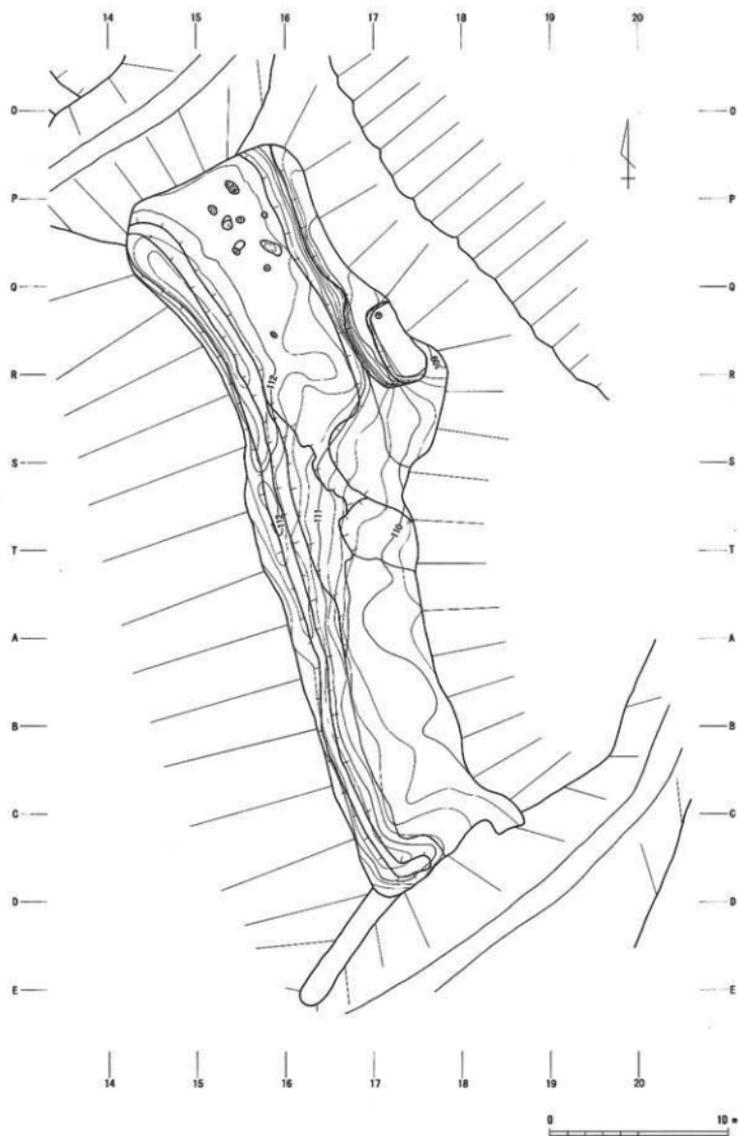
また、実際の曲輪が現状よりも広がったとはいえ、細長い曲輪に多くの兵が常駐することは困難と思われ、基本的には通路として使用されていたと考えられる。

土塁に設定したNo.1、2トレンチでは、何回かに分け土を盛った様子が確認できた。No.6トレンチでは、土塁の土が流出し低くなっていたため、土塁構造が明確に判断できなかったが、No.1、2トレンチ同様に造成されていたと考えている。また、No.1、2トレンチでは確認されなかった土塁の基部がNo.6トレンチでは地山の削り出しにより形成されていることが確認された。

土塁の基部が一部削り出しであることから、尾根の頂部を削り平坦部を作り出すと共に、その上砂を利用して土塁を築いたと考えられる。



第7図 堂の尾曲輪土塁断面図



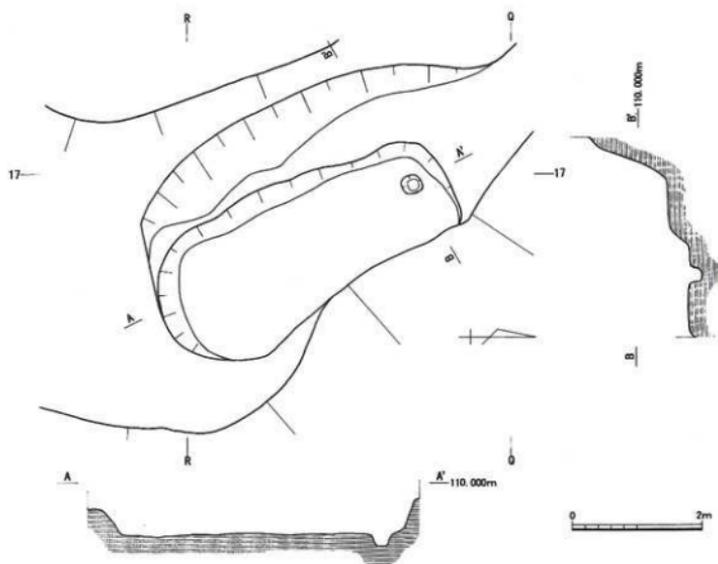
第8図 堂の尾曲輪完掘図

No.7トレンチによる調査において、ピットが検出された。周辺を清查した結果隅丸
 方形の平面プランが検出された。ピット近くや、床面直上で堂の尾曲輪の他の場所で出
 土している遺物と同様の遺物の出土があったため、城に伴う遺構と考えられる。

図示はしていないが、検出されたピットの南方約3.6mにわずかな窪みが確認されて
 いる。検出されたピットとは対照的な位置関係に有り、場合によっては、もう一つの
 ピットの痕跡となる可能性が有る。

遺構の時期は出土遺物から見て、16世紀後半ごろと考えている。また、柱穴と思わ
 れるピットが1つしか検出されなかったため、上屋構造がどのようなものであったかは推測
 するしかないが、上の段と、1本ないしは2本の柱で屋根になる部分を支えていた小屋
 掛けの構造と考えている。

また、当遺構内のピットからは、天目茶碗と茶入が重なった珍しい状態で出土して
 いる。



第9図 堂の尾曲輪小屋掛け遺構実測図

井楼曲輪について

井楼曲輪は堀切を挟み、堂の尾曲輪の北側に位置している。

最初に土塁の様子を確認するため、No.1～5トレンチを設定し調査した。その後グリッドラインを土層観察のベルトとして残し、平面調査を実施した。

曲輪南側は幅5mほどと狭く、曲輪先端近くで大きく東に曲りながら広がっている。その、曲輪北側の最も高く、広がっている部分を中心に、柱穴と考えられるピットが検出されており、何らかの建物があつたと考えている。ピットの並びは明確ではないが、ピットの直径が約50cmと大きく、検出された場所が高天神城の中でも最北端にあることと合わせて考えるならば、見張りのための櫓台があつた可能性が考えられる。

天正2年に武田方が攻めてきた際、この曲輪では本間、丸尾の兄弟が櫓に登り兵を指揮しており、兜の飾りが輝いていたのを目印にされ、鉄砲に狙撃され戦死したと伝えられている。

また、「堂の尾」は「塔の尾」であるという説もあり、今回の調査結果と合わせると、櫓があつた可能性は非常に高いと考えている。

井楼曲輪南側は堂の尾曲輪と同様に狭く、本来兵が常駐するには適さないと考えられ、堂の尾曲輪と同様通路として使用していたと推測される。

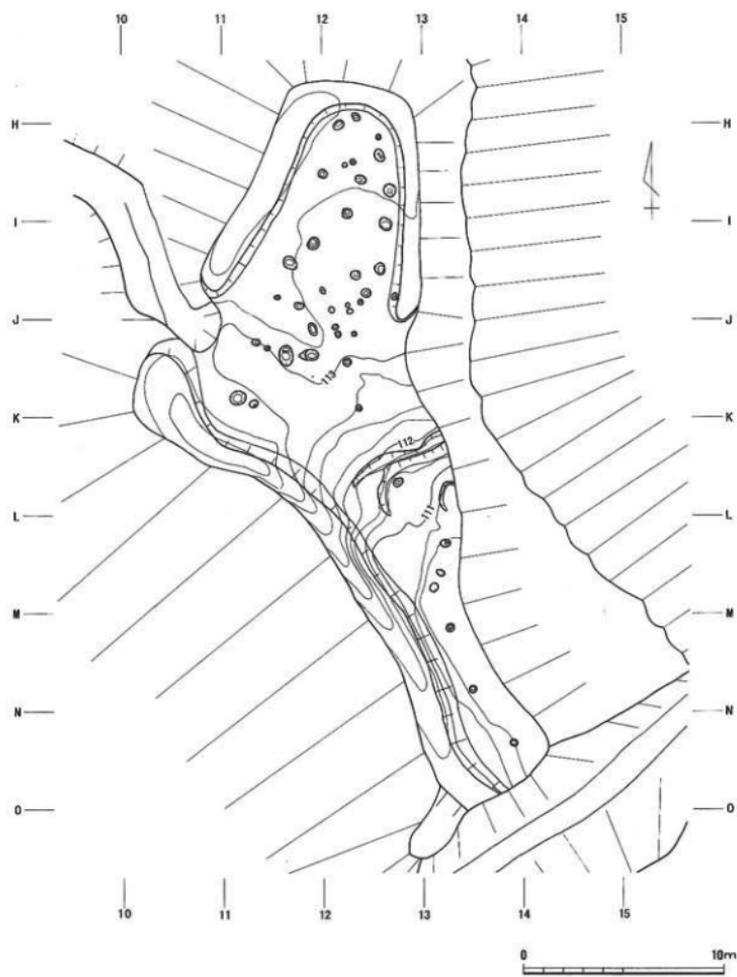
また、曲輪が東に曲っている部分で土塁が途切れており西側の横堀へ通行することができるため、この部分が虎口と考えられる。

曲輪北端近くの土塁付近では、西側にかけて拳大の礫が多数検出されたが、覆土中にあり遺構に伴わない。これらの石は下方から攻めてくる敵兵に投げつけるための礫である可能性も考えられる。

土塁は堂の尾曲輪同様、曲輪西側に築かれており、先端部では南側が空いたコの字状にめぐらされている。先に、先端部には櫓台が存在した可能性を述べたが、その櫓台を囲むよう東側まで土塁を築いたと考えられる。

土塁の構造は地山削りだしの基部を作り、その上に何回かに分け盛土をし築かれている。

No.3～5トレンチからは、いずれからも土塁の西側斜面に凹状部分が検出されている。3ヶ所をつなげると曲輪に沿った溝のような施設が想定され、斜面を下の敵兵に見つからず横移動するための武者走りのような、何らかの遺構の存在が推測される。



第10図 井楼曲輪完掘図

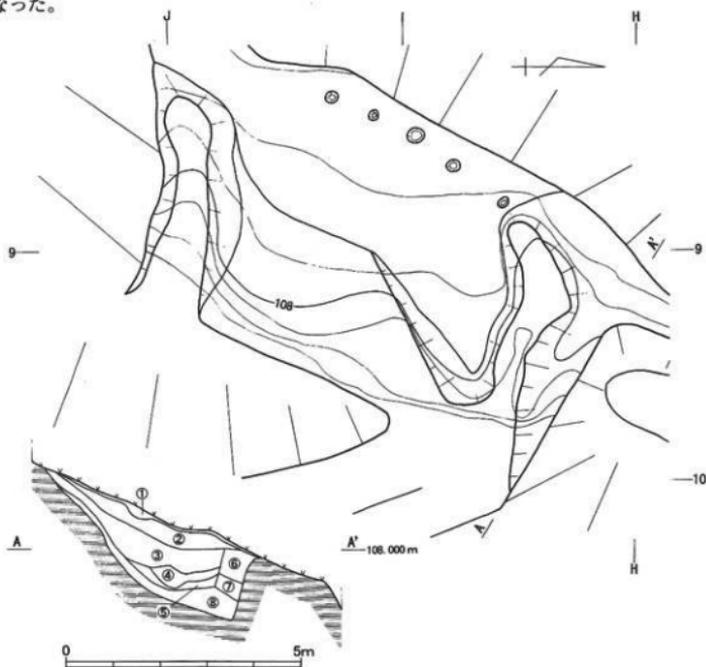
腰曲輪について

現在、井楼曲輪の西側下に、平坦部を見ることができる。その平坦部が腰曲輪であり、調査は曲輪の向きにあわせベルトを設定し土層観察のため幅30cmをベルト状に残して調査を進めた。調査の結果、腰曲輪の南北には土塁が築かれていたことが明らかとなった。曲輪西側には柵列跡のピットが検出されている。

また、腰曲輪北側の斜面を清查した結果、腰曲輪は元々堀であったと思われる痕跡が確認された。しかし、この堀は西側の南北に長く延びる横堀とは繋がっておらず、土橋で区切られていた。さらに、反対の腰曲輪北の横堀とは繋がっていたと考えられ、腰曲輪の部分が埋め立てられた際、さらに深く掘り下げられたと考えている。

この腰曲輪の部分に平坦部を確保することで、この周辺の施設が防御のみを目的とした施設から、積極的に出入りのできる施設に作り替えられたといえる。

残念ながら遺物の出土は少なく、時期決定はできなかった。しかし腰曲輪には確実に二時期あること、落城の際の姿は埋め立てられた状態であるということが明らかになった。



第12図 井楼曲輪腰曲輪完掘図

二の丸について

真北に合わせたグリッドを設定し、ベルトは曲輪の軸に合わせて、調査を行なった。

二の丸の調査前の現況では西から東に向け、緩やかに下る地形を呈しており、表土および堆積土を除去した段階で二の丸が大きく三段に分かれていることが判明した。

最上段には東を空けたコの字状に土塁がめぐり、北の土塁は東に行くに従って、徐々に低くなり途中で消滅しており、二の丸全てが土塁で囲まれてはいなかった。また、馬出し曲輪西側の土塁が二の丸斜面付近で西方向へ傾く様相が見られることから、この二の丸最上段の土塁とは、実際には繋がらないが、一連の防御形態をとると考えられる。土塁上には柵列の存在を示すピットは検出しなかった。最上段の平坦部ではピットが検出されており、櫓台が存在する可能性も考えられるが、土の堆積は少なく、数cmで地山が検出され、遺構面の残存状況も非常に悪く、堆積土が比較的多いところでも15cmほどで遺構面に到達した。

中段ではピットが多く検出された。数は多く検出されているが、ピット同士の並びが明確ではなく建物の存在を示す程度である。

最下段では礎石と思われる石が検出された。しかし、中段のピット同様明確な並びは認められず、建物の存在する可能性を示している。なお、検出された礎石は火を受けた痕跡が確認された。

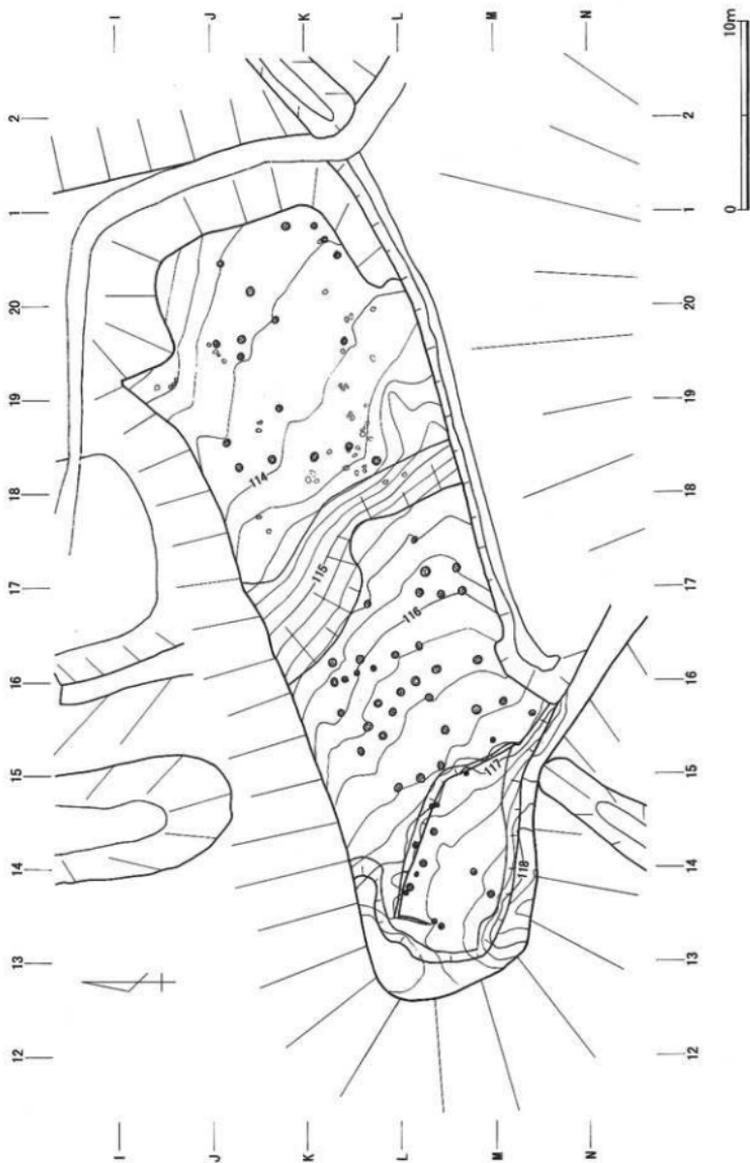
また、最下段東端では柵列の跡が検出された。二の丸東側には柵列が巡らされ、入口以外の部分からは簡単に二の丸に入ることができないようにされていたと思われる。

二の丸の南側、西の丸と繋がる急斜面沿いに、排水溝が確認された。

二の丸に登る通路は周囲の調査結果から、現状における登り口と同様で、袖曲輪から直進してつきあたる部分ではないかと考えている。土砂がさらされているため、明確な虎口を示す遺構は検出されなかった。

二の丸の発掘調査においてピットが数多く検出し、建物が存在したことが判明し、さらに、礎石と思われる石も多く、礎石建物も存在したことが明らかになったが、いずれも建物の跡となる明確な並びではないため、どのような建物があったかその詳細は明らかにならなかった。また、礎石は火を受けた痕跡があり、天正9年の落城後に焼き払われたと言われている伝承を裏付ける証拠になると考えている。

遺物は中段からの出土が最も多く、特に多かったのは最上段との境にあたるM15グリッドで、多量の甕の破片が出土した。この付近にはピットの検出も多く、多量の破片は、建物跡との関連性も想定される。



第13図 二の丸完掘図

袖曲輪について

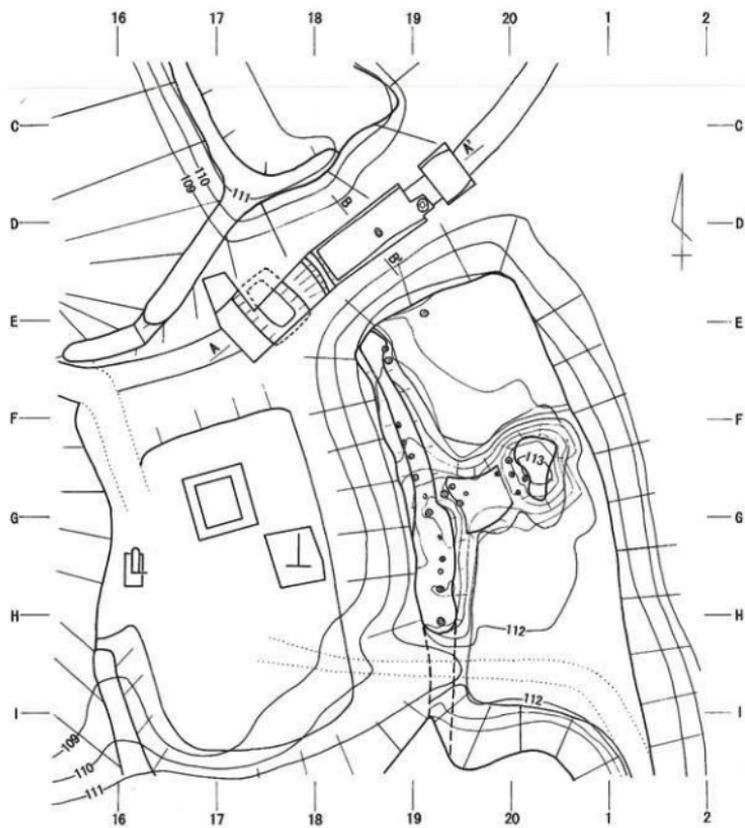
袖曲輪は、二の丸同様曲輪の向きに合わせ、土層観察のベルトを設定し、平面調査を行った。袖曲輪は西側に土塁がめぐり、二の丸と接する部分で切断され、現在は切り通しとなっているが、調査の結果、通路は後世の作成と考えており、当時は土塁が続いていたと考えられる。中央近く東側には西側の土塁と直行する向きで土塁があり、それを境に大きく2区に分けられる。二つの土塁が最も近くなる箇所においてピット群が検出しており、門が建っていた跡と考えている。門を境に、二の丸の内側と外側とといった区分けがなされていたと考えられる。

土塁の清查では柵列跡を示すピットが検出された。袖曲輪の東側には柵列や土塁などの施設はなく、袖曲輪においても堂の尾曲輪同様西側の防御を主としていた。

袖曲輪北側の堀切の形状を把握するため、堀底とほぼ並行に幅広いトレンチを設定し、平面的に掘り下げた。堀底では橋脚跡が二ヶ所検出された。袖曲輪の北端部においてもピットが検出されており、その位置は橋脚跡のピットの延長線上であり、木橋の根元の部分になると考えると、堀切には木橋が架っていたと考えられる。

また、堀切の西側には、高さ30cmほどの畝があり、そのさらに西側には高低差が2mほどになる溝が作られていた。おそらくは、容易に橋脚の根元にたどり着けなくするため、作られた施設と思われる。

堂の尾曲輪から二の丸に向かうルートとして木橋を渡り門を抜けようやく二の丸にたどり着くというルートが想定される。敵兵に攻め込まれるなどの非常事態になった場合、木橋を落とし、門を閉めることにより進行を食い止めていたと考えられる。



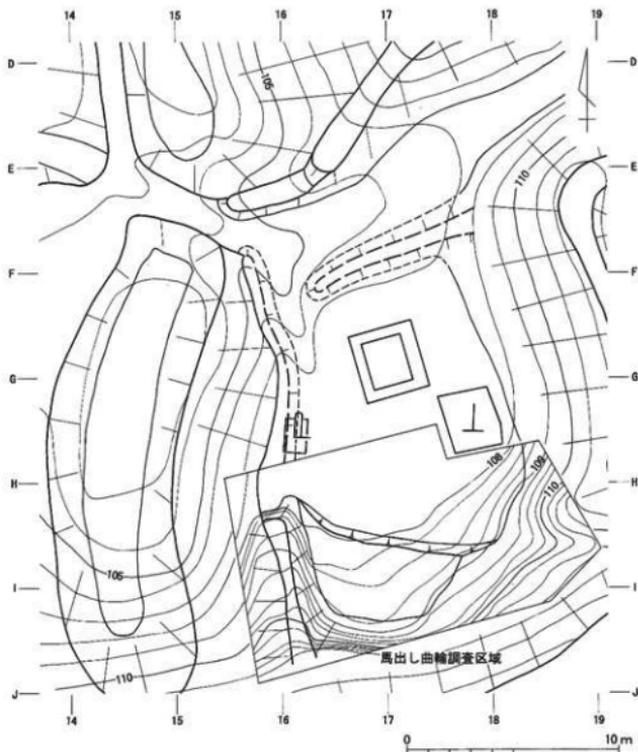
第14図 袖曲輪完掘図

馬出し曲輪について

高天神城跡西側の谷筋に沿い、城内に至る小道がある。この道を上り、土橋を渡ると馬出し曲輪に到達するが、袖曲輪の項でも述べたように、堀切の西側には高さ2mの溝が有り、橋脚に容易にたどりつけないようになっている。

さらに、現在二の丸に通じている通路は当時は土塁が繋がっていたと考えており、そのため、馬出し曲輪にたどり着いた場合、来た道に戻る以外にどこにも抜け出すことはできず、袋小路に追い込まれ、二の丸、袖曲輪、堂の尾曲輪など、高所からの攻撃をなすすべもなく受けたと思われる。

いわば、西側の土橋からこの馬出し曲輪に掛けては敵兵を欺き、おびきいれ討ち取るための機能を有していたといえる。

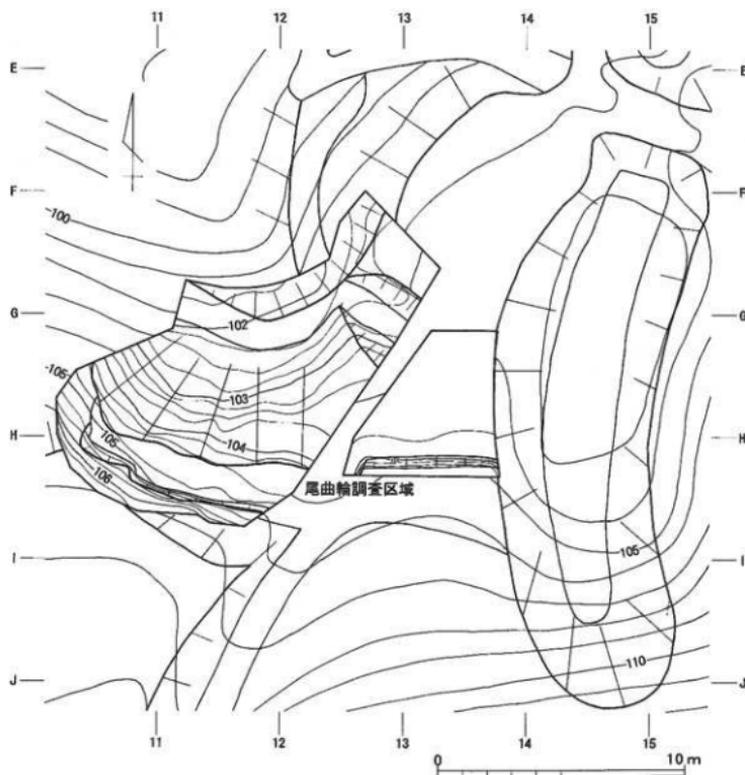


第15図 馬出し曲輪実測図

尾曲輪について

馬出し曲輪の項でも述べたが、現状の道は麓から谷底に沿ってあがってくるが、尾曲輪直前で、傾斜のきつい箇所を上がっているため、つづら折りの道になっている。すぐ南には谷底の続きがあるにも関わらず、その部分を通らないのは不自然さが感じられる。本来の道は谷底に沿って上がっていくルートではないかと考え、尾曲輪の調査を実施した。

調査では谷筋に沿って傾斜が上がっていく地形は確認できたが、明確な通路状の遺構は検出されなかった。しかしながら、尾曲輪と横堀との境近くにおいて通路状になっている箇所が検出された。おそらく谷筋を上がり尾曲輪から横堀の土塁上に上がるルートになるのではないかとと思われる。



第16図 尾曲輪実測図

横堀について

平成10年度調査のNo.2トレンチを下方の横堀および土塁を越えるまで延長し、堀底が検出されるまで掘り下げた。土塁頂部から深さ3m以上掘り下げたところで堀底が検出された。堀の種類は底の断面が箱型になる箱堀である。横堀東斜面の崩落が繰り返され、次第に堀が埋め立てられ、現在の姿になっていることが判った。

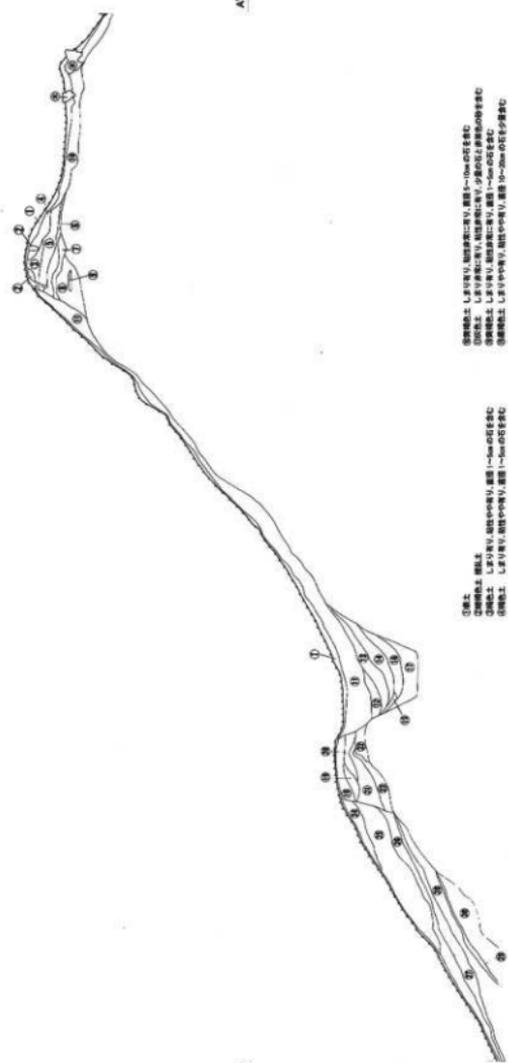
平成13年度調査では、No.7,9～12トレンチを設定し、調査を進めた。いずれのトレンチにおいても平成10年度と同様、箱堀が検出された。箱堀が検出されたことにより、堀底を通路として使用していたのではないかと想定もされ、堀底へ上り下りする施設の有無を確認した。横堀の北端部分に設定したNo.9トレンチでは、横堀が地山に突き当たり終了していることが確認され、また、一部堀底を広く掘った箇所においてもそれらの施設は検出されなかった。このため、堀底ではなく土塁上を通路として使用していたとの想定をもとに、横堀西側の土塁上を清查したが、土塁上に柵列等のピットの検出はなく、その結果からもやはり土塁上を通路として使用していたとすのが良いかと考えられる。また、腰曲輪北側にも横堀があり、堀の形態は他と同様箱堀であった。

平成13年度調査のNo.10トレンチでは二重の横堀がどちらも箱堀であり、内側の堀と比べ、外側の堀はやや浅いが、井楼曲輪の防御施設が嚴重に作られていたことが確認された。

平成14年度には二の丸西側下にNo.2～4トレンチ、馬出し曲輪西の横堀にNo.5トレンチを設定し、調査を行った。二の丸西側下の部分については、当初通路と考えており、地山が直ぐに検出されるものと考えていたが、調査した結果、この部分も堀であったことが判明した。

その他の横堀と同様、箱堀であることが確認できた。他の横堀と違うのは、横堀北端においてはその始まりが明確ではないことと、端近くで、敵が検出されたことである。敵検出部分については、後で詳しく述べる。

二の丸ゾーンの横堀は、その総延長はおよそ200mになり、高天神城内においてもこれほど、横堀が巡らされた場所は他にはなく、曲輪の土塁と共に西からの敵の攻撃に嚴重に備えていたことが判った。

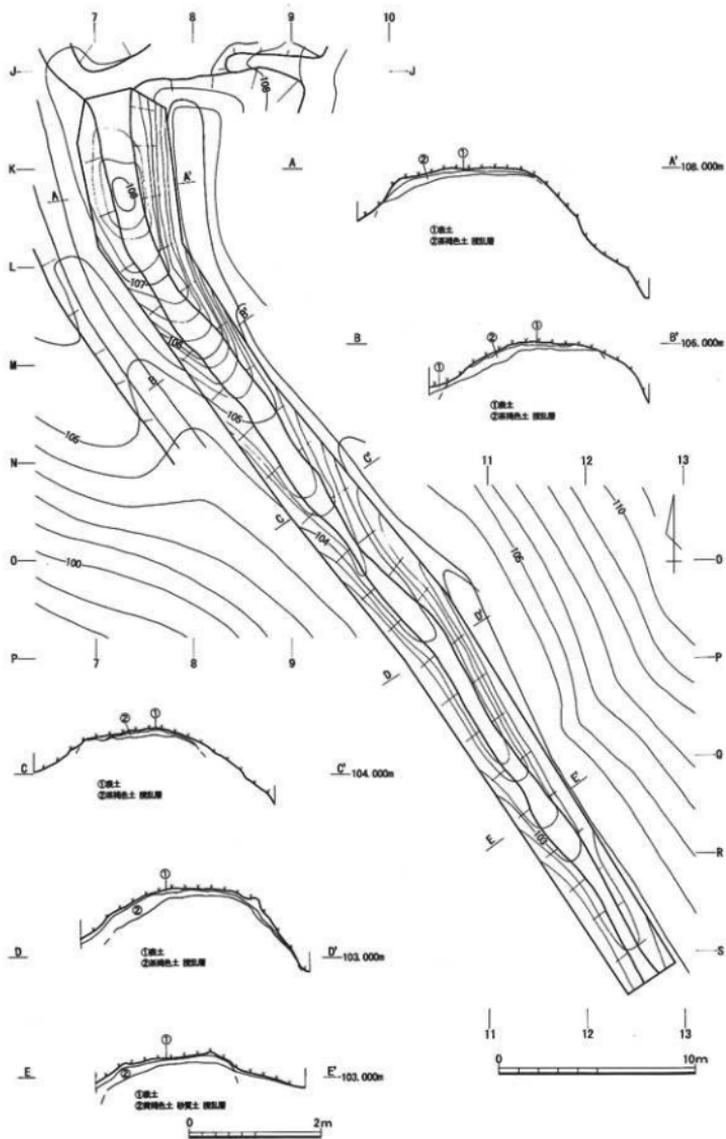


A' 105,000m

第17図 堂の尾曲輪No.2トレンチ実測図

1 礫層 礫層に砂質土質、礫層 1-2m の厚さあり
 2 礫層 礫層に砂質土質、礫層 1-2m の厚さあり
 3 礫層 礫層に砂質土質、礫層 1-2m の厚さあり
 4 礫層 礫層に砂質土質、礫層 1-2m の厚さあり
 5 礫層 礫層に砂質土質、礫層 1-2m の厚さあり
 6 礫層 礫層に砂質土質、礫層 1-2m の厚さあり
 7 礫層 礫層に砂質土質、礫層 1-2m の厚さあり
 8 礫層 礫層に砂質土質、礫層 1-2m の厚さあり
 9 礫層 礫層に砂質土質、礫層 1-2m の厚さあり
 10 礫層 礫層に砂質土質、礫層 1-2m の厚さあり
 11 礫層 礫層に砂質土質、礫層 1-2m の厚さあり
 12 礫層 礫層に砂質土質、礫層 1-2m の厚さあり
 13 礫層 礫層に砂質土質、礫層 1-2m の厚さあり
 14 礫層 礫層に砂質土質、礫層 1-2m の厚さあり
 15 礫層 礫層に砂質土質、礫層 1-2m の厚さあり

0 5m



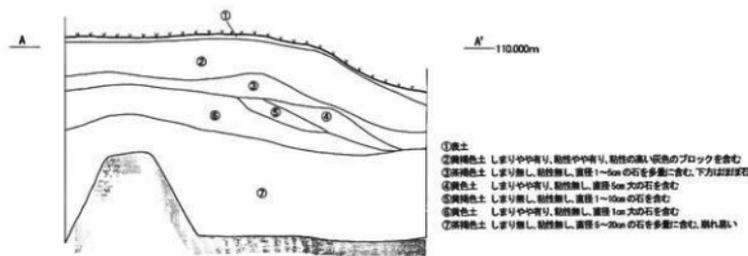
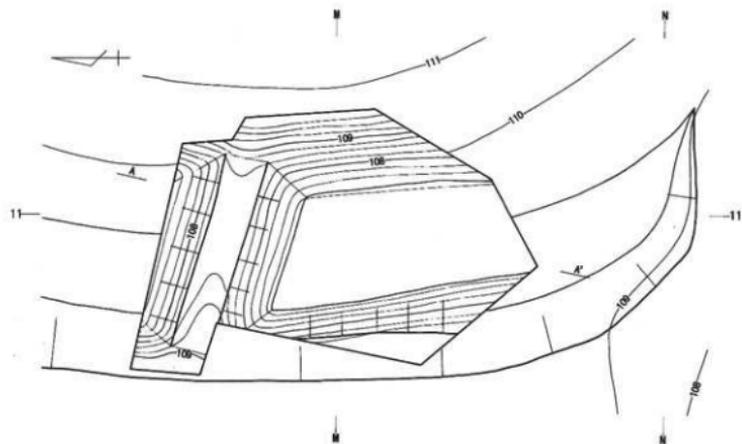
第20図 横堀西側土層実測図

敵堀について

二の丸西側斜面下において、当初通路と考えていた部分において横堀が検出された。堀の深さは現地表面から約1.5mで北側の横堀と尾曲輪の間に至り消滅している。

馬出し曲輪と同様この横堀に入り込むと抜け道はなく、袋小路に追い込まれ、高所からの攻撃を受けたと考えられる。

さらに横堀の南端では武田の城には珍しい敵が検出された。敵はそれほど高くなく、乗り越えようとして、乗り越えられなくはない。しかし、その先は崖となっており、どちらにしても通り抜けはできない。敵が横堀の端にあるため、その先の崖地を事前に確認することはできない。崖が見えるのは敵を乗り越えた後になり、その時には後続が押し寄せ、戻ることはできず、崖に落下してしまうこととなる。馬出し曲輪と同様に敵兵を欺き、自滅させるための施設ではないかと考えている。



- ①黄土
- ②黄褐色土 しまりやや有り、粘性やや有り、粘性の強い礫石のブロックを含む
- ③黄褐色土 しまり無し、粘性無し、直径1~5cmの石を多量に含む、下方は球状石
- ④黄褐色土 しまりやや有り、粘性無し、直径5cm程度の石を含む
- ⑤黄褐色土 しまり無し、粘性無し、直径1~10cmの石を含む
- ⑥黄褐色土 しまりやや有り、粘性無し、直径1m程度の石を含む
- ⑦黄褐色土 しまり無し、粘性無し、直径5~20cmの石を多量に含む、塊れ強い

第2トレンチ

第21図 敵堀実測図

0 2m

土橋について

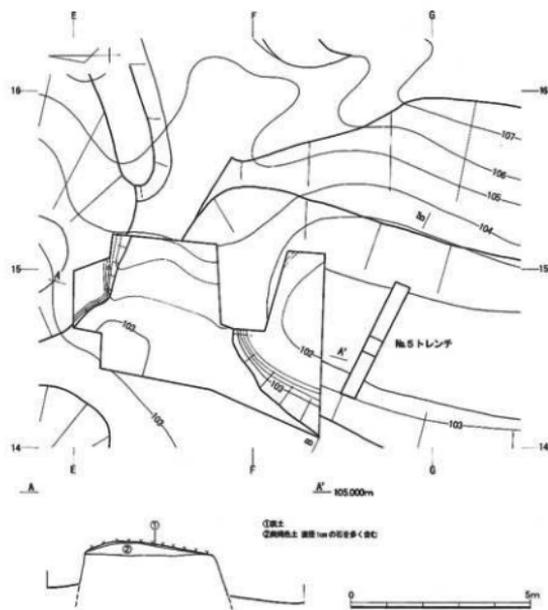
馬出し曲輪、尾曲輪の項でも述べたように、西の谷筋から登る小道があり、馬出し曲輪に繋がる部分を土橋としていたが、横堀の様子が明らかになり、城内のルートが想定されてくるとこの土橋は後世に横堀を埋立て、造られていると考えられた。

そのため、土橋およびその周辺において、平面調査および、堀側からも調査を行った。

平面調査は、およそ30cm掘り下げたところで地山が検出され、横堀側からの調査においても堀の壁が検出された。これらの結果から、土橋は当時より存在していたことが明らかになった。

しかし、この土橋をわたっても、堀切、馬出し曲輪の項でも述べた通り、二の丸など、先へ進むことはできない。

いずれにせよ土橋は存在し、その先はどこにも繋がらないという結果があるのみで、推論に過ぎないが、袋小路に追い込むための罠ということは十分に考えられる。敵を騙し欺く偽の道として、馬出し曲輪と合わせて、一つの機能を有していたのではないだろうか。

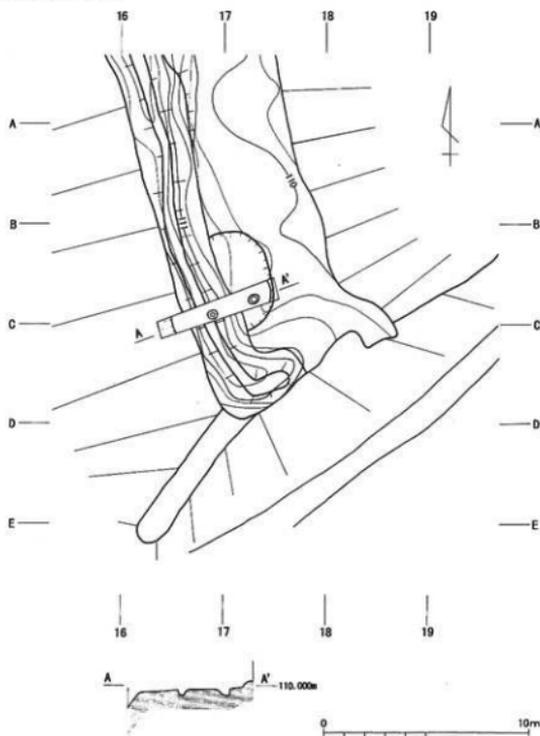


第23図 土橋周辺実測図

その他の遺構について

堂の尾曲輪では堅穴状の遺構が検出されている。平面プランはおそらく楕円形を呈すると考えられ、内部からピットが二つ検出されている。検出されたピットは土塁の下を地山まで掘り下げなければ検出されなかったため、明らかに土塁が築かれる以前の遺構である。

さらに、堅穴状遺構内からの遺物の出土はなかったため、遺構の時期を判断するのは困難であった。しかし、他の想定は考えにくく、少なくとも山城としての遺構で、武田期以前に築かれたものと考えられる。また、トレンチ調査により一部のみが検出された遺構であり、今回の発掘調査はあくまで山城である高天神城が落城した際の最終形態を明らかにすることが目的であるため、堅穴状遺構の詳細を明らかにするための完掘は行なわなかった。



第25図 堂の尾曲輪検出遺構実測図

遺物について

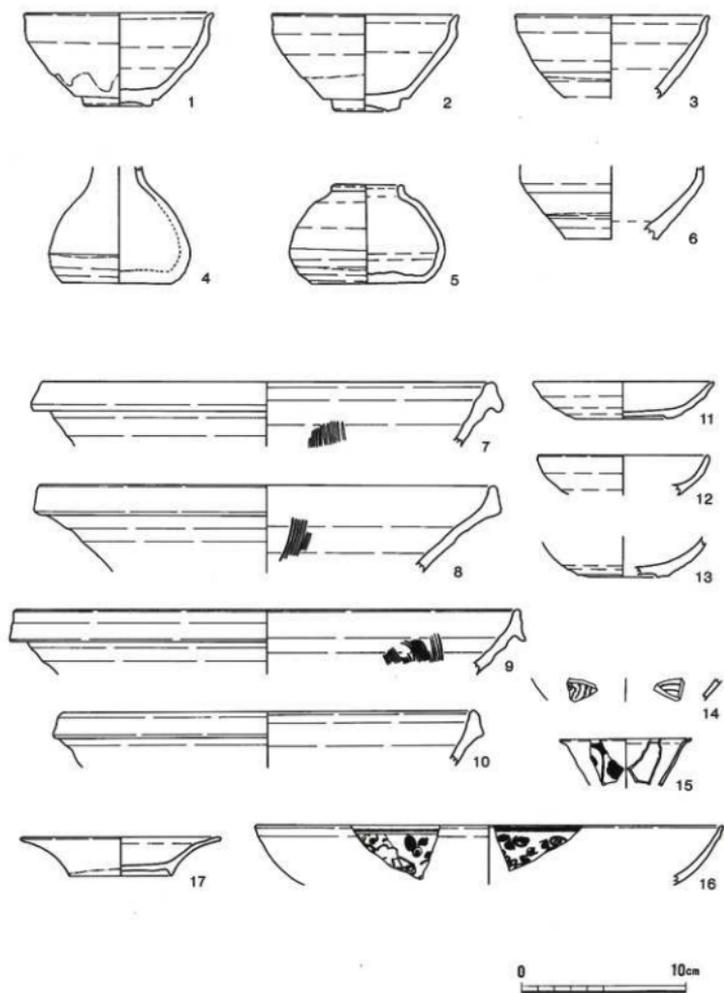
堂の尾曲輪出土遺物(第26図～第28図)

第26図1～3、6は天目茶碗で、瀬戸美濃産である。1の胎土は緻密で明茶色、焼成は良好、鉄軸が施されている。2の胎土は緻密で茶褐色、鉄軸が施されている。1、2とも内反り高台を持ち、完形で出土した。大窯Ⅱ期後半に比定される。3、6の胎土は緻密で明茶色、鉄軸が施され、共に大窯Ⅲ期に比定される。4は小瓶で口縁部が欠損している。胎土は緻密で明茶色、錆軸が施されている。大窯Ⅰ期からⅡ期の間と思われる。5の茶入れは完形で出土している。胎土は緻密で茶褐色、鉄軸が施されている。大窯Ⅰ期からⅡ期と思われる。器形は「茄子」などと呼ばれる種類である。1と4、2と5はそれぞれ、天目茶碗の上に被せ、重なった状態で出土した。2と5の組は堂の尾曲輪の小屋掛け遺構内のピット中から出土した。しかし、1と4の組は遺構面よりやや低い高さで出土しているが、周辺は木の根による攪乱が激しく、周囲に遺構が存在したとしても破壊されていたと思われる。重なって出土した2組の遺物については、意識的な埋納の可能性も考えられる。

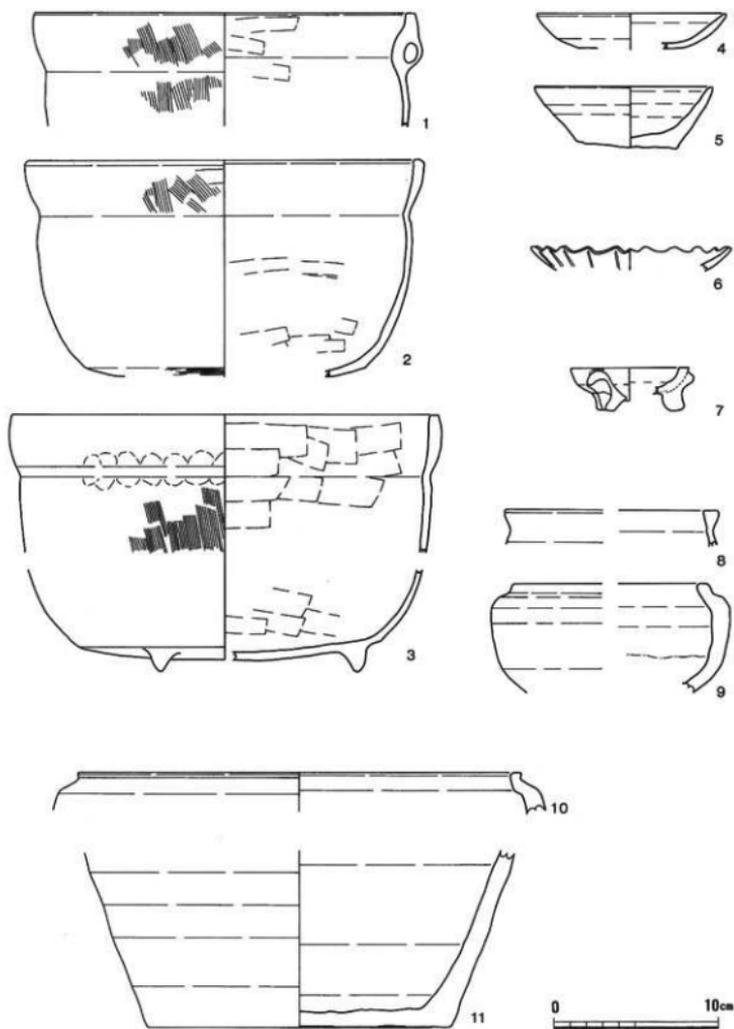
7～10はすり鉢で、胎土は密で明茶色、錆軸が施されている。7は大窯Ⅱ期に、8、9は大窯Ⅲ期に比定される。10は大窯Ⅲ期後半の遺物である。11は丸皿で胎土は緻密で、明茶褐色、鉄軸が施されている。大窯Ⅱ期に比定される。12も丸皿である。胎土は、明茶色で大窯Ⅱ期に比定される。13は丸皿で、胎土は密で明茶褐色を呈し、鉄軸が施されている。大窯Ⅱ期に比定される。14～16は染付で、14は連通椀、15は端反の小坏、16は染付E類の大皿である。いずれの胎土も緻密で、白色を呈す。17は白磁の皿である。胎土は緻密で白色、灰白色の釉薬がかけられている。15世紀後半から16世紀頃と思われる。

第27図1～3は土鍋で、1は内耳鍋である。2と3とは破片がまとまって出土し、接合、器形の確認ができた。3では脚も出土した。土鍋の外側には煤が付着し、火にかけて使用した痕跡が認められるが、内側には何の痕跡も残っていないため、湯を沸かすためのみに使用されたとも考えられる。

4、5はかわらけである。6は菊皿で、胎土は緻密で灰褐色を呈す。灰白色の釉薬を施している。胴部に筋を入れ、口縁部を波状に整えている。7は香炉で、胎土は緻密で、赤茶色、脚が付いており、化粧土をかけたうえで銅緑軸が施されているが、二次加工の痕跡が確認できたため、他の用途に使用されたかもしれない。本来の口縁が欠損したためか、改めて口縁を切り出し、磨かれている。中国華南三彩に似た特徴が見られるため、その可能性も考えられる。8は広口有耳壺で、破片の数が少ないため、口径は復元できなかった。大窯Ⅰ期に比定される。9は水注か甕の口縁部、歪みが激しく、破片も小さいため、口径の復元は不可能であった。10は甕の口縁部である。11は甕の底部である。

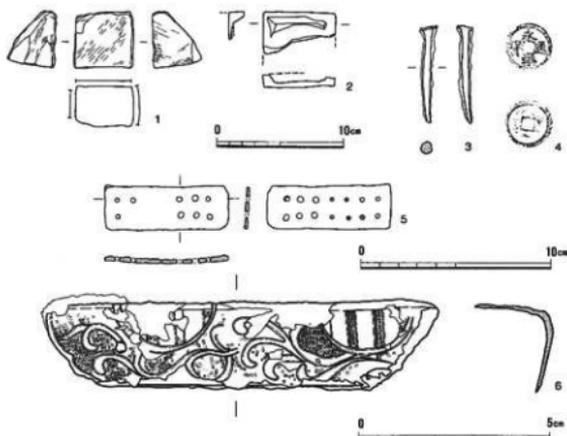


第26図 堂の尾曲輸出土遺物実測図①



第27図 堂の尾曲輪出土遺物実測図②

第28図1は砥石である。使用した痕跡が3面に認められる。2は硯で、縁の断面が斜めになっており、15世紀代の古い硯の特徴を有している。3は鉄釘で、断面は四角形を呈する。4は永楽通寶である。5は木箱の角に付ける飾り金具と思われる。表面に金箔が張られ、細かな細工が施されている。丸に三つ引きの家紋のような模様が認められる。6は鉄製の板に小さな穴が空けられている。おそらく、鎧の小札で、紐で同様のものを多く繋いでいたと思われる。

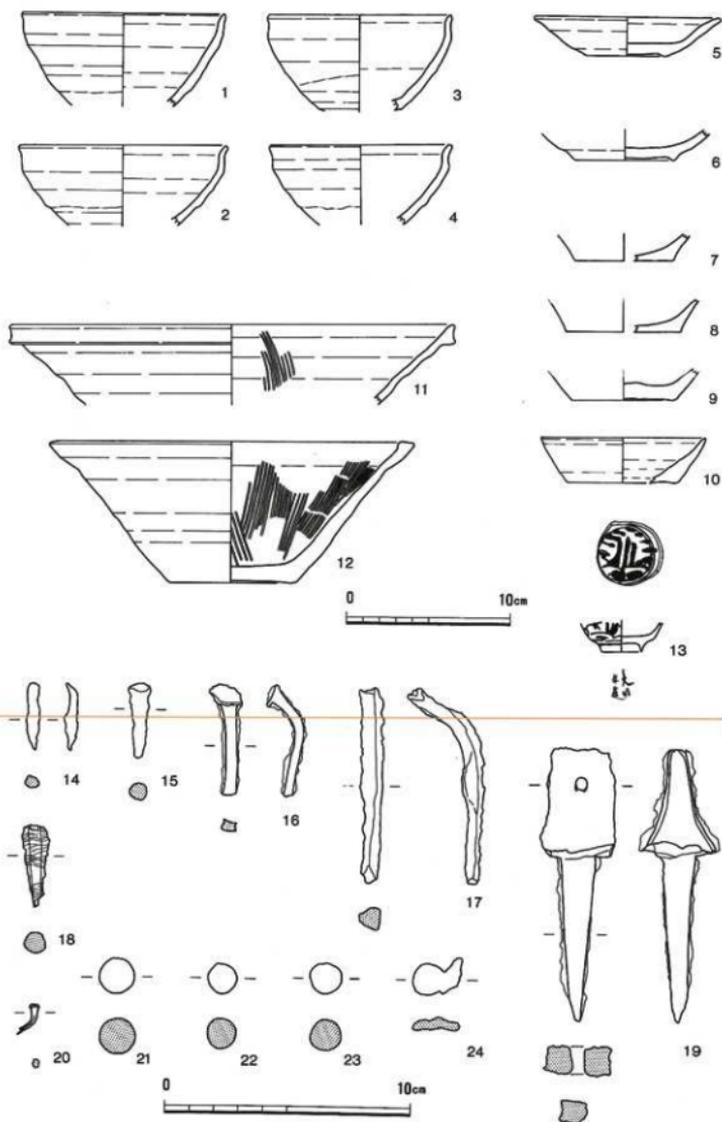


第28図 堂の尾曲輪出土遺物実測図③

井楼曲輪出土遺物 (第29図)

第29図1~4は天目茶碗で、1、2の胎土は緻密で明茶色、鉄釉が施されている。1は大窯Ⅰ期であり、2は大窯期と思われる。3、4は緻密で、明茶色の胎土で、鉄釉が施されている。大窯Ⅲ期前半である。5は椀皿で、胎土は緻密、明茶色を呈す。鉄釉が施されている。大窯Ⅱ期である。6は丸皿で、灰釉が施されている。大窯Ⅱ期かⅢ期と考えられる。7~10はかわらけである。11、12はすり鉢で、胎土は緻密、明茶色を呈し、錆釉が施されている。11は大窯Ⅰ期、12は口縁部が内側にせり出すようになっており、大窯Ⅱ期である。13は染付の碗で胎土は緻密で白色、内面、外面ともに彩色されている。高台内には「大明年造」銘が入る。中国景德鎮系と思われる、年代は16世紀後半と推定される。12、13は井楼曲輪、堂の尾曲輪間の堀切からの出土である。

14~24までは金属製品である。14~18は釘で、断面は四角形である。19は茎と思われる部分があり、柄のついた道具と思われる。20は銅製のピン状の遺物で、鎧などの飾り金具ではないかと思われるが詳細は不明である。21~24までは鉛製の鉄砲玉で、大きさは径1.5cm程度と、径1.3cm程度の2種類あるようである。24は変形しており、使用されたと思われる。



第29图 井楼曲輪出土遺物実測図

二の丸出土遺物(第30図～第34図)

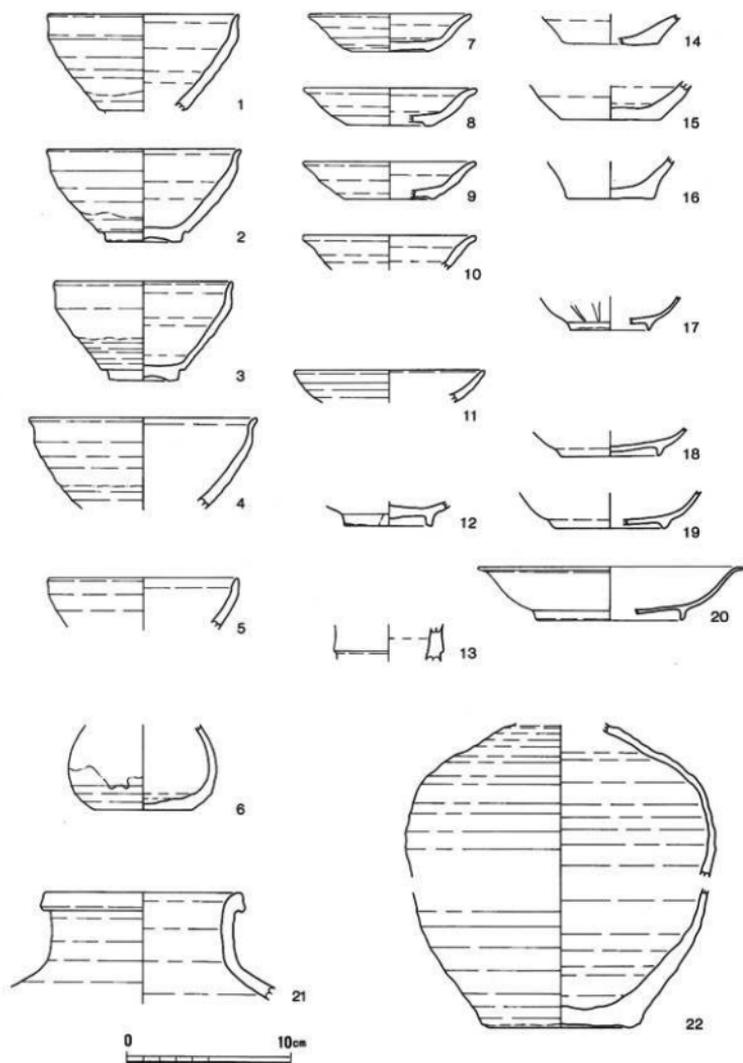
第30図1～5は天目茶碗で、1、2は大窯Ⅱ期に比定される。3、4は大窯Ⅲ期前半、5は中国産である。6は小壺か小瓶と考えられ、鉄軸が施されている。大窯期と考えている。7～9までは稜皿で、鉄軸が施されており、大窯Ⅱ期に比定される。10は稜皿で、鉄軸が施されている。大窯Ⅲ期前半に比定される。11は丸皿で、灰軸が施されている。大窯Ⅱ期後半に比定される。12は丸碗で、鉄軸が施されている。大窯Ⅲ期前半である。13は大型の花瓶である。14～16はかわらけである。17～20は白磁製品であり、17は菊皿、18～20は皿である。21は瀬戸美濃の四耳壺の口縁部である。22は底部から肩部へ徐々に広がり、頸部で急に細くなる、根来型瓶子である。

第31図1～7はすり鉢で、1は大窯Ⅰ期に比定される。2は大窯Ⅱ期かⅢ期と思われる。3～5は大窯Ⅲ期後半、6、7は大窯Ⅲ期に比定される。いずれも瀬戸美濃産である。8～10は染付B1類の皿である。11、12は羽釜の蓋、13は羽釜である。11～13までは同じ場所からの出土であるが、蓋二つに対し、身が一つと数が合わない。14は梅瓶(メイビン)で、胎土は緻密で外側は淡い青色を呈している。表面には渦紋が施されているが、破片のため、紋様全体の様子は分からない。二次焼成を受け、表面がざらざらした状態になっている。

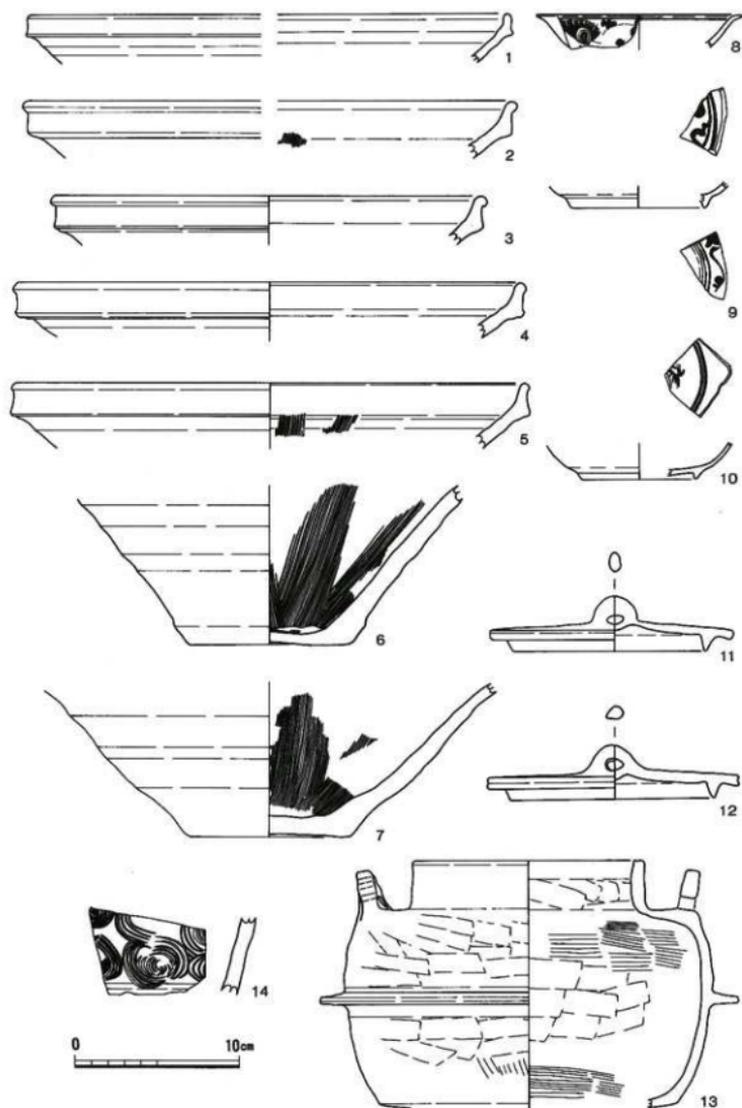
第32図1は土鍋の口縁部である。2～5、10は甕、6～9は徳利で、時期は6は大窯Ⅲ期であり、7～9が大窯Ⅱ期もしくはⅢ期と考えている。

第33図1、2は常滑産の甕で、16世紀後半である。

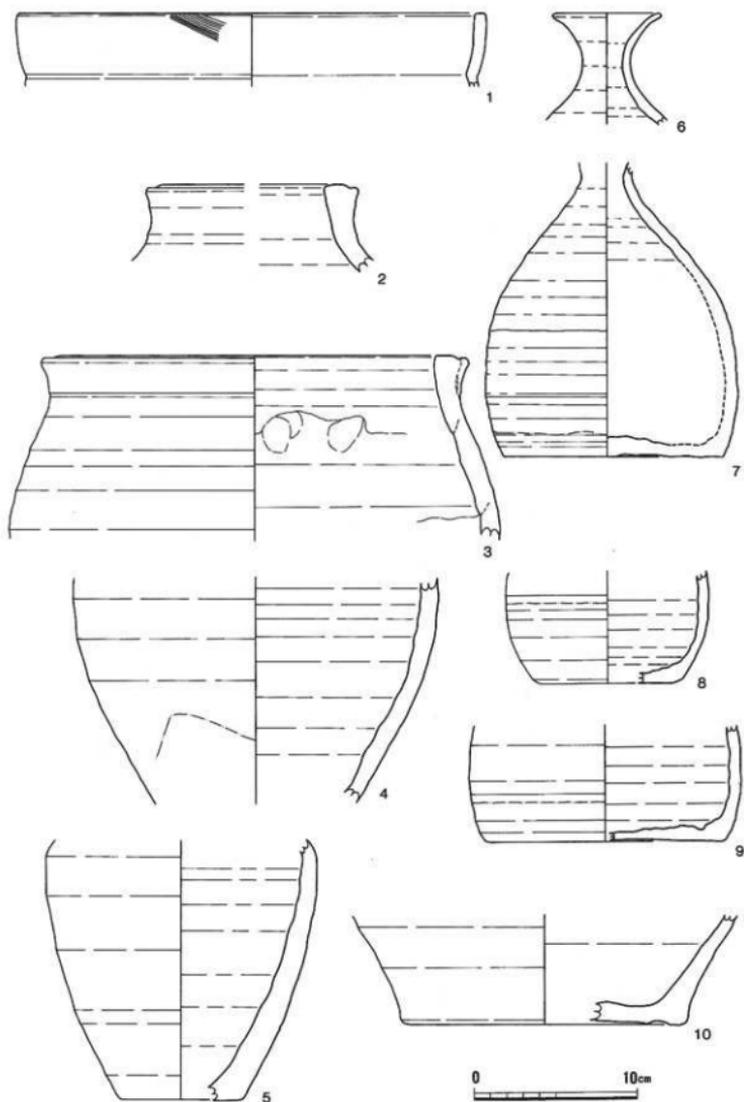
第34図1～3は鉄釘である。4、5は文久永寶である。6は砥石で断面は六角形を呈しており、研ぐ位置を頻繁に替え、使用していたと考えられる。7、8は陣笠に塗られた漆の部分で、陣笠の本体ではないが、裏側に布目の痕跡が残っている。



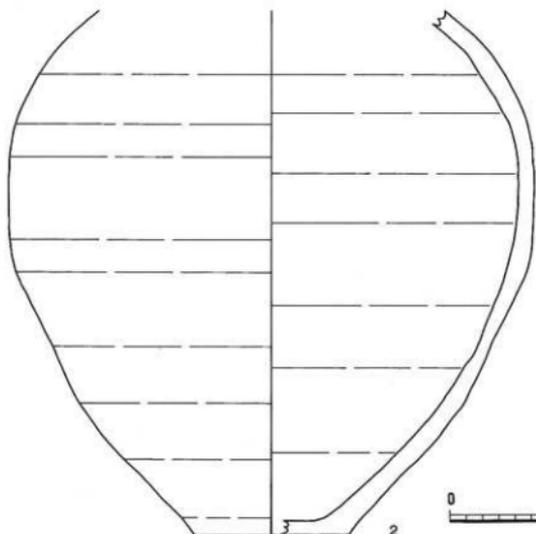
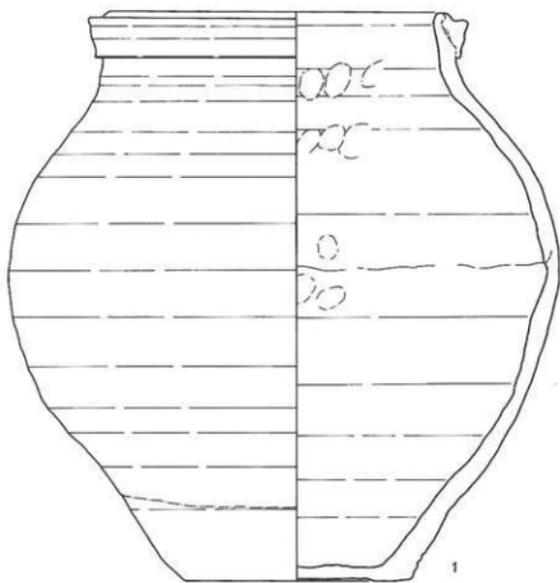
第30図 二の丸出土遺物実測図 ①



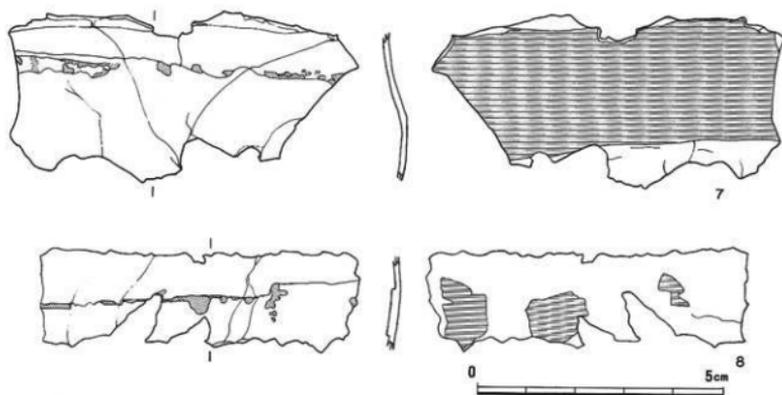
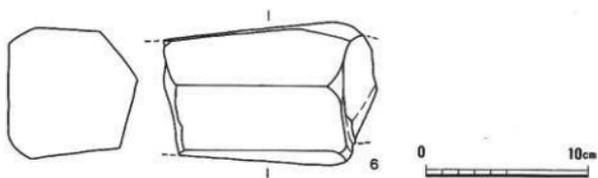
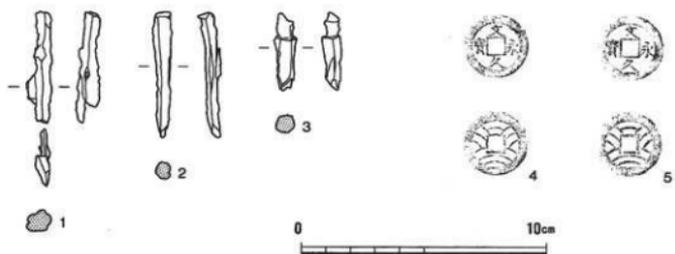
第31図 二の丸出土遺物実測図②



第32図 二の丸出土遺物実測図 ③



第33図 二の丸出土遺物実測図 ④



第34図 二の丸出土遺物実測図⑤

土橋出土遺物(第35図1)

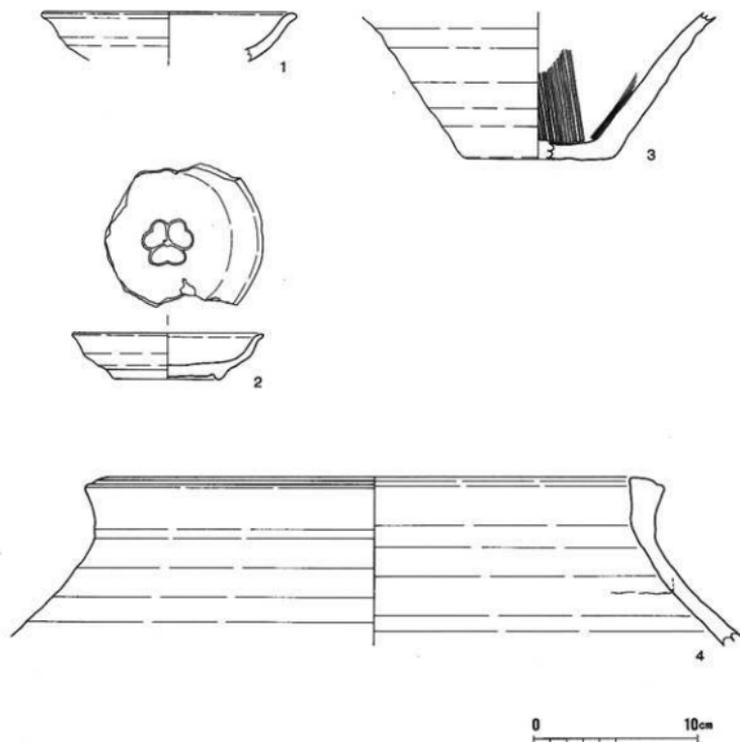
端反皿で、胎土は緻密で灰釉が施されている。瀬戸美濃産で、大窯Ⅰ期に比定される。

袖曲輪出土遺物(第35図2.3)

2は端反皿で、胎土は緻密で灰釉が施されている。底部内面には、印花文が施されている。大窯Ⅰ期に比定される。3はすり鉢で、胎土は密で鉄釉が施されている。大窯Ⅱ期に比定される。

馬出し曲輪出土遺物(第35図4)

甕の口縁部である。



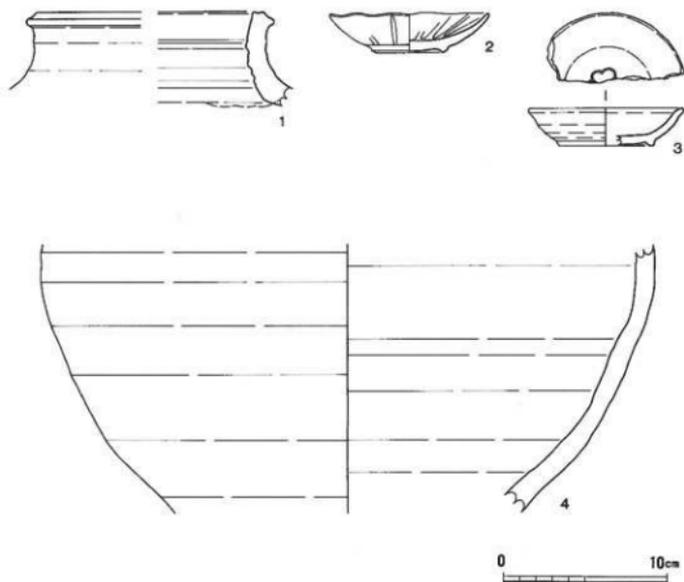
第35図 土橋、袖曲輪、馬出し曲輪出土遺物実測図

横堀出土遺物(第36, 37図)

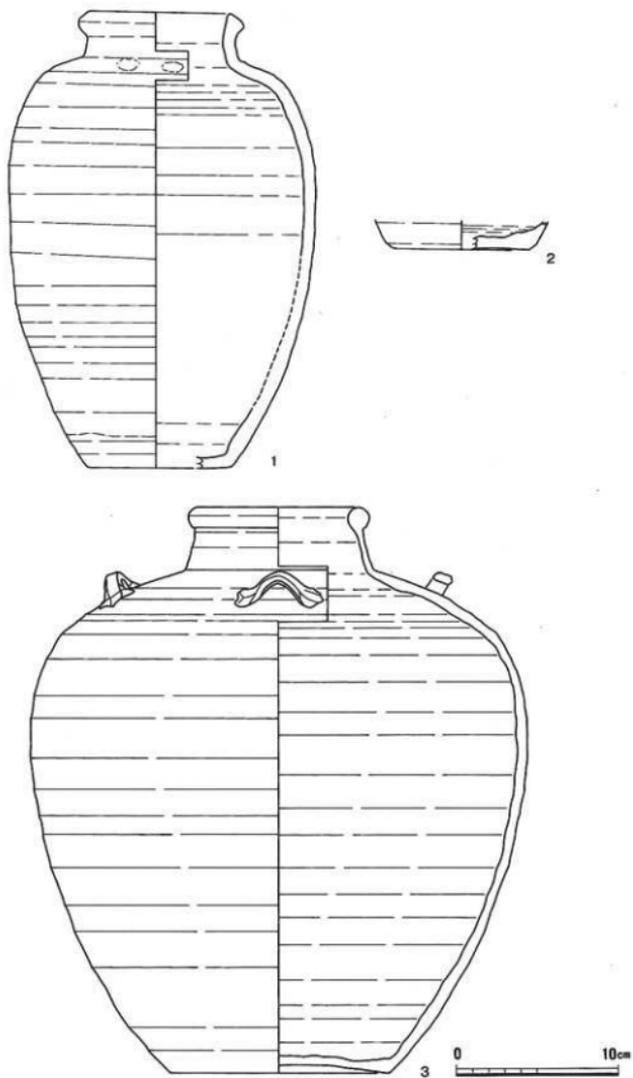
第36図1、4は甕。2は白磁の菊皿、3は端反皿で、大窯Ⅰ期に比定される。第37図2は徳利の底部。大窯Ⅱ期かⅢ期と思われる。1、3は四耳壺、3については茶壺として使用していたと考えられる。

尾曲輪出土遺物(第38図)

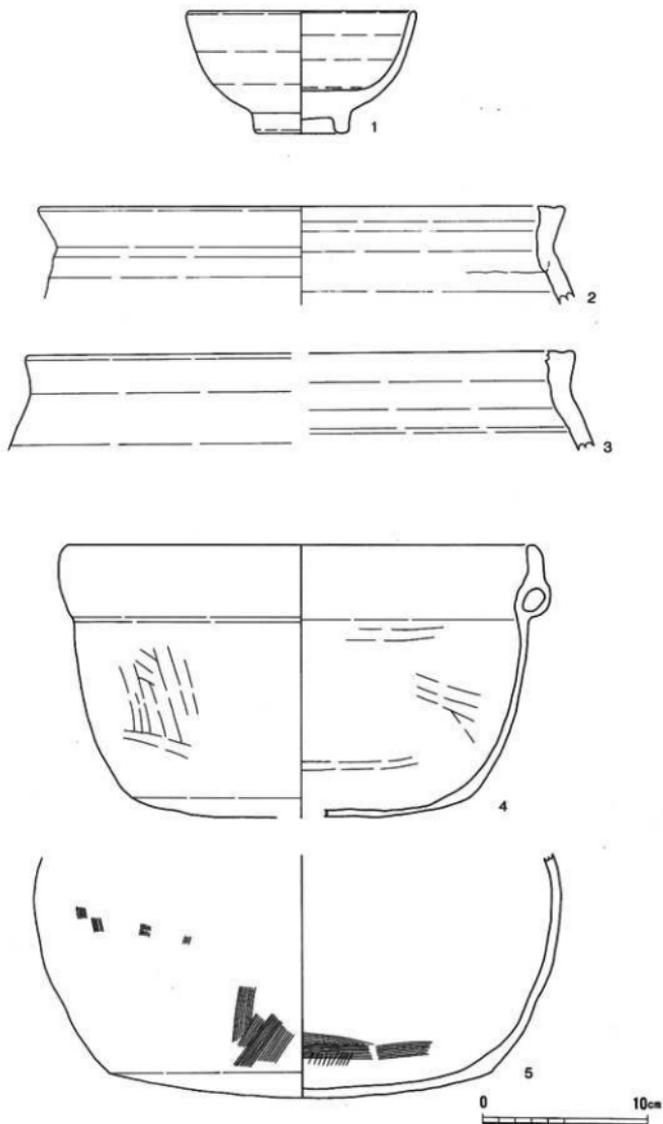
1は青磁の碗。胎土は緻密で灰色、表面は濃緑色を呈す。2、3は甕の口縁部。4、5は内耳鍋で、胎土は密で、焼成はやや不良、表裏とも煤けたように黒く変色している。4には内耳部分が残存していた。



第36図 横堀出土遺物実測図 ①



第37図 横堀出土遺物実測図②



第38図 尾曲輪出土遺物実測図

まとめ

史跡高天神城跡二の丸ゾーン発掘調査の結果、これまで地表面の観察のみでは判らなかった、新たな事実が明らかになった。

二の丸ゾーンは全体的に土塁はさらされてしまっており、実際は現在よりも高くなることが想定される。土塁の基礎の部分と同じ曲輪内でも違いが見られ、地形に応じ臨機応変に作り上げていたと思われる。

堂の尾曲輪、井楼曲輪の東斜面は一部崩落しており、実際はもっと広い曲輪であったと考えている。しかし、兵が常駐できる程の広さはないため、主に通路として使用されていたと考えている。

横堀西側の土塁は土が流出してしまっているが、堀内部については多量の土砂が堆積しており、築造当時の姿をとどめているといえる。堀は箱堀であり、横堀内部の調査から、堀底から土塁、曲輪などに上がる遺構は確認されず、また、土塁上の清查においては、欄列など、土塁上に構築された施設の痕跡もなかったため、土塁上を通路として使用していたと考えている。

二の丸においては、建物を示すピットおよび、礎石が検出されたが、いずれも、明確な並びがなく、建物の詳細の確認は困難であった。しかし、礎石には火を受けた痕跡が認められ、落城後焼き払われたことを裏付ける証拠になると考えている。

また、地表面の観察からは判らなかった、堂の尾曲輪の小屋掛け遺構、二の丸の排水溝、堀切の畝と溝、横堀の畝が検出されている。

堂の尾曲輪南方において検出されたの堅穴状の遺構や井楼曲輪西側の腰曲輪で確認できた古い時期の堀など、明らかに時代の異なる遺構の存在が確認され、高天神城にはいくつかの姿があることが判明した。時代の異なる遺構については完掘を行っていないため、共伴遺物の検出は無く、その時期が、徳川時代なのか、今川時代なのか、それともさらにさかのぼるのかは調査では明らかにできなかった。

城として機能していた当時の通路は、現在使用している通路と大半では同じと考えているが、若干は異なっていたようである。

一番の大きな違いは、現在、山麓から城内に西側から出入できる細い道があるが、この道は土橋を渡り、馬出し曲輪を抜け、二の丸と袖曲輪の間に通じている。しかし、袖曲輪、二の丸の間は土塁が繋がっており、当時の城内への通路ではないことが判った。

当時は、まず土橋を渡り堀切に向かうと、堀切手前に溝があり通行止めとなる。馬出し曲輪に向かってもそこから上には行けない。また、直接二の丸に向かうため、尾曲輪を通り、堀に沿って南に進んでも、畝で行き止まりになる。畝は乗り越えられる高さであるが、横堀の端に築かれているため、その先の様子は判らず、乗り越えた後で、その先が崖で進めないことが判る。

よって、北上するルートが残されるが、このルートも堀底を進むと、北端まで行った所で壁に突き当たり、上に上かれず行き止まりになる。

最も正しいルートは、土塁上を通ることとなるが、この場合、堂の尾曲輪、井楼曲輪から丸見えであり、高所からの攻撃をまともに受けてしまったであろうと思われる。

土塁上の通路も、腰曲輪に繋がる箇所で急に狭くなっており、大人数で攻め入れれば、この部分で滞ってしまうと思われる。

さらに、井楼曲輪から二の丸に至るまでには木橋のかかった、二つの堀切、袖曲輪には門があり、敵兵の侵入を防ぐことはもちろん、有事には堀切にかけた木橋を落とす、門を閉め外敵の侵攻に対処していたと考えている。

また、堂の尾曲輪では調査前の予想に反し大量の遺物が出土した。土器が大半を占め、器種としては天目茶碗、茶入、小瓶、甕、すり鉢、土鍋、香炉、丸皿、かわらけなどがある。中には輸入品と考えられる陶磁器も出土している。他に釘などの鉄製品も出土している。天目茶碗には茶入、小瓶に伏せられ重なった特殊な状態で出土したものもある。

井楼曲輪は堂の尾曲輪と比べ、遺物の量は少ないが天目茶碗、甕、すり鉢、土鍋、皿類、かわらけ、染付などの破片が出土しており、出土遺物の構成は堂の尾曲輪の構成と似ている。おおむね、16世紀中頃から後半にかけての遺物と考えられ、高天神城跡をめぐる戦いが激しくなった時期とも一致する。

井楼曲輪からは鉄砲玉も出土しており、高天神城の戦いにおいても鉄砲が使用されたことが証明され、本間、丸尾の兄弟が鉄砲に狙撃されこの地で戦死したという伝承を裏付けることとなった。

二の丸は遺物の量が最も多く、構成は堂の尾曲輪、井楼曲輪と似ている。天目茶碗、甕、すり鉢、土鍋、皿類、かわらけ、染付、梅瓶(メイビン)などの破片が出土しており、特に甕の破片が多く出土している。また、陣笠の漆膜と思われる遺物の出土があり、高天神城跡の調査において、初めて有機物の遺物が出土した。

高天神城の二度の落城はどちらも堂の尾曲輪から攻め込まれており、今回調査した二の丸ゾーンは常に戦いの最前線であり、かなり激しい攻防があった場所である。当然、城内の他の場所と比べても、緊張感が高かったと思われる。そのような場所において、一方では敵兵の襲撃に備えるための嚴重な遺構、もう一方では日常生活を営んでいたこと示す多量の遺物。この両極端とも思える二つの事柄は何を示しているのだろうか。

高天神城は、本来戦闘のための山城で、通常であれば有事の際に詰めるための城であったのが、戦況の変化と共に包囲網が徐々に縮められ、城内以外の行き場を失い、ついには籠城した。その籠城が予想以上の長期間となったため、二の丸をはじめとする各曲輪は常に警戒を怠ることができず、曲輪での生活を余儀なくされたという状況下にあったためではないかと考えられる。

おわりに

史跡高天神城跡の整備事業に伴う発掘調査を開始し、3ヶ年が経過した。そしてようやく、二の丸ゾーンの調査が終了し、まず最初の区切りがついた。

冒頭からも述べているように、教科書にも記述される『今川・武田・徳川』といった中世・戦国時代を代表する武将が関わった山城である。従って、訪れる見学者も多く、町としてもシンボリックに扱ってきた。しかし、落城後、廃城となったため古文書等の文献資料に乏しく、その詳細については不明な部分が多かった。また、自然の地形を利用した天然の要害であるがゆえに、たびたび土砂崩落などの被害に遭っており、遺構のき損が心配され、史跡としての地形が変化してしまうことが考えられた。

そこで、整備事業に着手し発掘調査を開始したが、広大な山の上の急傾斜地で、しかも機械力を一切使わずの調査には限界があった。加えて、神社境内であるため常に参拝者の通路を確保し、調査後には埋め戻して完全に復旧しなければならなかった。このため、廃土置き場に苦慮し、流れ出ないために全ての土を土のう袋に詰め置き、それを山の上に、あるいは山の下にと人の手により移動して調査を進めた。また山城では、トレンチという“点”での調査では十分な成果も得られず、認識不足や城郭構造の研究不足を痛切に感じた。さらに、本報告書についても、担当者の力量不足により、内容的に不備な点やご批判等々々あると思うが、皆様方に一読いただきご教示願いたい。

その中でも、多くの出土品とともに、今まで伝えられてきた事象を裏付けたり、縄張図では判らなかつた遺構の発見など、多くの成果があったと思う。

こうして終わった今回の調査は、まだ二の丸ゾーンのみで、史跡高天神城跡の全貌は明らかになっていない。今後、二の丸ゾーンの整備とともに、本丸ゾーン、三の丸ゾーンと順次発掘調査を進めていく計画である。

最後になったが、調査から報告書作成まで、関係各位にご指導とご協力を賜った。ここに感謝の意を申し上げ、おわりの言葉としたい。

参考文献

- 『大東町誌』大東町 1984
- 『大東町誌第二集』大東町 2001
- 『高天神城の総合的研究』大東町教育委員会 1993
- 『静岡県地学のガイド』コロナ社 1992
- 『史跡高天神城跡保存管理計画』大東町教育委員会 1996
- 『史跡高天神城跡基本整備計画』大東町教育委員会 1999
- 『大東町文化財地名表・分布地図』大東町教育委員会 2001
- 『美濃焼 考古学ライブラリー17』ニュー・サイエンス社 1984
- 『戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品 資料集』(財)瀬戸市埋蔵文化財センター 2001
- 『瀬戸大窯とその時代』(財)瀬戸市埋蔵文化財センター 2001
- 『図解・日本の中世遺跡』東京大学出版 2001
- 『城郭探検クラブ』人物往来社 2003
- 『城を歩く【その調べ方・楽しみ方】 別冊歴史読本38』人物往来社 2003
- 『高根城跡』I～VI 水窪町教育委員会 1994～1999
- 『勝間田城』I～VIII 榑原町教育委員会 1986～1994
- 『史跡武田氏館跡』I～IX 甲府市教育委員会 1985～2002